第３章　出土遺物

今回の調査では、28リットル入りコンテナ約200箱分の遺物が出土した。その大半は江戸時代に属すると考えられる土器、陶磁器、瓦類、土製品、石製品、石造物、金属製品（鉄製品・銅製品）、動物遺存体等であり、他に中世に属すると考えられる瓦や、近代に属する瓦、煉瓦がある。このうち図化を行ったものは土器・陶磁器・土製品等396点、瓦41点、石製品５点、鉄製品26点、銅製品21点である。法量等の詳細は観察表にゆずり、本章では、種別ごとに概要を述べる。

第１節　土器・陶磁器[1]等

（１）第１遺構面

ＳＥ102出土遺物のうち、土師器皿（灯明皿）や陶器（碗：肥前系、嬉野窯、京焼系、皿：瀬戸美濃窯、火入れ：丹波窯）を図化した。ほかに須佐窯の擂鉢などが出土している。

ＳＥ103では、土師器皿、磁器（碗・小坏：肥前系）を図化した。ほかに在地系と考えられる柿釉を施した花生や須佐窯の擂鉢などがある。

ＳＸ101からは、土師器（皿・炮烙）や陶器（碗：嬉野窯）のほか、白磁片が出土している。土師器炮烙は、難波分類のＤ類に相当するものと考えられ、18世紀以降に盛行するようである。

ＳＫ103には、江永窯の陶胎染付筒茶碗13や波佐見窯の猪口14、花生15がある。

ＳＫ121では、土師器蛸壺17や波佐見窯青磁染付碗18を図化した。

ＳＸ131では、土師器皿・炮烙を図化した。炮烙19は、難波分類Ｂ類（17世紀第２四半期以降成立）であろうか。ほかに肥前系京焼風碗や丹波窯火入れなどが出土している。

ＳＸ103では、埋桶の内部から銭貨などとともに出土した磁器八角鉢20がある。口縁部内面は墨弾きによる文様を施し、見込みに宝袋を描く。

ＳＰ101出土の土師器蛸壺22は胞衣壺に転用されていたものである。

ＳＸ113出土遺物には、図61上段に示したものがあるが、23・24と同形・同大の碗は他にも数個体分ある。５個程度の単位の組み物の一部と考えられる。またこの遺構からは、写真図版26・27に示したように、水滴や飯事道具などの特徴的な遺物が多く出土している。これらのものは完形品がほとんどなく、いずれも破片の状態であるが、水滴には同文あるいは同種のものもみられ、ややまとまった量が出土していることに特徴がある。

ＳＫ115の土師器火舎35には、底部内面中央にらせん状のヘラガキや、同隅に墨書による文様が描かれている。

ＳＫ110からは、土師器炮烙や景徳鎮窯青花碗が出土している。土師器炮烙36は、口縁部に接して一対の把手（中央に円孔を穿つ）がつくタイプで、難波分類のＤ類であろう。景徳鎮窯の碗37は見込みに水禽文をもち、16世紀末のものと考えられる。

以上、第１遺構面の遺構出土遺物については、18世紀前半のものが主体を占めるが、中には18世紀後半～19世紀を示すものがあり、第１遺構面検出遺構の時期に幅があることを示している。

（２）第２遺構面

ＳＢ209からは、イロリ断割中に唐津窯坏や甕皿が出土している。17世紀第１四半期のものと考えられ、やや古い時期のものであり、断割中の出土でもあるためＳＢ209より古い時期を表しているのかもしれない。

ＳＸ203からは、波佐見窯碗（43・44）や瀬戸美濃窯菊皿45、須佐窯擂鉢などが出土した。

ＳＸ204では土師器皿２点（54・55）を図化した。

ＳＢ201については、第２章でも述べたように、火災にあって焼失し、その後盛土を伴う整地が行われ、おそらく町屋が建て替えられたものと考えられる。ここでは、床面、焼土面、焼土層、整地層といった堆積層ごとにそれぞれの出土遺物を検討するが、結論を先にいえば、各層位から出土した遺物に時期差は認められないと考えられる。

上面整地層については、ＳＢ201とＳＢ202の境界が明確ではないため、正確にＳＢ201のみの整地層と断定できないが、土師器、陶器、磁器などが出土している。陶器には唐津窯碗・皿や、嬉野窯碗・皿、京焼系碗、瀬戸美濃窯皿、備前窯花生、須佐窯擂鉢などがあり、磁器には波佐見窯碗・皿などがある。ＳＢ201裏としたＳＢ201建物の西側敷地内と考えられる地区の整地層からも土師器焼塩壺、嬉野窯碗、唐津窯擂鉢、須佐窯擂鉢、波佐見窯皿・仏飯具などがある。その下層の焼土層では、初期伊万里碗、波佐見窯碗・鉢、漳州窯青花皿などが出土している。焼土面上からは波佐見窯碗・小坏などが出土している。ＳＢ201裏焼土面では備前窯擂鉢、須佐窯擂鉢がある。床面では、土師器皿、唐津窯擂鉢、波佐見窯皿、肥前系白磁皿などが出土している。

イロリ（＝ＳＰ201）では土師器皿72などが出土している。

先述のように焼失後に整地が行われているため複数の層位から出土した破片が接合した例があるほか、ＳＢ201以外の他の遺構から出土した破片とも接合したものがある。59の波佐見窯碗や60の産地不明陶器甕、62の波佐見窯盤などが該当する。

ＳＢ201に付随する施設として建物の西側で検出した２基の長櫃状遺構（ＳＸ127・ＳＸ209）のうち、特にＳＸ127からは多量の遺物が出土した。調査段階では上層・下層・最下層として大きく３段階に分けて遺物を取り上げたが、上層出土の破片と最下層出土の破片が接合したものもあることなどから層位による時期差はないものと判断した。そのため実測図も層位に関係なく掲げている。

ＳＸ127出土遺物には土師器皿・炮烙、瓦質土器火舎、嬉野窯皿、肥前系京焼風碗、肥前系白釉碗、唐津窯鉢、瀬戸美濃窯擂鉢、須佐窯擂鉢、波佐見窯皿・蓋碗蓋、肥前窯碗・小坏、景徳鎮窯青花皿などがある。

ＳＸ209からは、量的には少ないものの、土師器皿、初期伊万里皿、肥前窯碗などが出土した。

ＳＢ202では上面整地層から、土師器、唐津窯皿、瀬戸美濃窯皿、波佐見窯皿などが出土している。上面焼土からは、唐津窯（甕屋窯のものか）鉢、初期伊万里窯皿、肥前窯碗･皿などが、上面検出中には初期伊万里皿・坏などが出土している。

イロリでは丹波窯擂鉢、波佐見窯小碗、景徳鎮窯皿、カマドからは土師器皿（灯明皿）などが出土している。

ＳＢ202に付随するＳＸ202からは、漳州窯青花盤の破片が出土している。

ＳＢ203では、上面整地層から、土師器、肥前窯碗、初期伊万里皿、波佐見窯碗・坏が出土し、ＳＢ203裏上面整地層からは、唐津窯皿、肥前窯碗などが出土している。ＳＢ203焼土層からは波佐見窯皿､同裏焼土層では須佐窯擂鉢などが出土している。またＳＢ203焼土面直上では、土師器皿、景徳鎮青花皿などが、同裏焼土面直上では肥前窯坏などが出土している。また建物部分の東側、斜面部分では土師器炮烙や波佐見窯坏などが出土している。

ＳＢ204では、上面焼土から土師器、唐津窯皿･盤、瀬戸美濃窯皿、備前窯壺･蓋、丹波窯擂鉢、初期伊万里皿などが出土している。

ＳＢ204に付随するＳＸ201からは土師器皿、波佐見窯盤、景徳鎮窯青花碗などが出土している。

ＳＸ208では埋桶内から唐津窯皿、丹波窯擂鉢・火入れなどが、掘形から土師器皿、初期伊万里皿などが出土している。

ＳＸ207からは土師器皿などが出土したほか、検出中に磁器水滴127が出土している。

ＳＢ205からは、土師器皿、備前窯徳利、波佐見窯碗、初期伊万里皿、波佐見窯碗などが出土している。

ＳＢ206からは土師器皿、初期伊万里皿などが出土している。

ＳＸ210からは、土師器皿（灯明皿）、施釉土師器皿（灯明皿）、嬉野窯皿、波佐見窯碗などが出土している。

第２遺構面出土遺物は概ね18世紀前半のものが中心であるが、17世紀第２四半期の初期伊万里や16世紀末～17世紀初めの中国製青花、備前窯製品、17世紀前半あるいは後半の唐津窯製品などやや古い時期を示す遺物が含まれる。

（３）整地層ほか

第２遺構面の下層については、特に東部において顕著であったが、整地に伴う土層の堆積がみられ、主に整地層という名称で取り扱った。また第２遺構面の基盤層からも遺物が出土した。これらの層位は第２遺構面よりも下位に位置し、第３遺構面よりも上位に位置することになるため、ここで扱うこととする。さらに、東部においては、頻繁に整地や穴の掘削が行われたことが予想される。整地層についても掘削中に土坑などがみつかることが多く、現地においては、整地層および整地層（下）として取り扱ったが、基本的に両者の間には顕著な時期差は認められない。

まず、東部の整地層および整地層（下）からは、土師器皿・焼塩壺、唐津窯皿・鉢、嬉野窯碗・皿、瀬戸美濃窯碗・皿、丹波窯火入れ、備前窯皿・火入れ、初期伊万里皿、波佐見窯碗・皿・小坏・仏飯具・青磁香炉、漳州窯青花盤などが出土している。漳州窯青花盤は16世紀末～17世紀初め頃に遡る可能性も有るが、他は17世紀後半ないし18世紀前半頃のものが多くを占める。

（４）第３遺構面

第３遺構面では特に、東部において顕著に遺構を検出し、遺構内からは多くの遺物が出土した。前述のように東部での遺構検出が整地層を掘り下げながら順次検出・掘削したものであることから、遺構出土の遺物と整地層出土の遺物に顕著な時期差はなく、また接合関係も認められる。以上の状況は、頻繁に遺構が掘削されたことを物語っていると考えられる。特に素掘りの遺構についていえることだと思われるが、東部で検出した遺構の多くはごみ穴であったり、あるいは整地を行う際の一つの単位としての穴である可能性も考えられる。

ＳＸ313からは、備前窯受付皿（灯明皿）、唐津窯徳利、丹波窯鉢、瀬戸美濃窯擂鉢、波佐見窯碗・徳利などが出土している。

ＳＸ315では、土師器皿（灯明皿を含む）、瀬戸美濃窯香炉、備前窯擂鉢、波佐見窯皿・坏・青磁坏、肥前窯碗、景徳鎮窯皿などが出土している。

ＳＸ351は、土師器皿・炮烙、施釉土師器皿（灯明皿）、唐津窯壺、瀬戸美濃窯碗、初期伊万里碗・皿、漳州窯青花碗などが出土している。

ＳＫ301は、まとまって遺物が出土した。土師器皿（墨書土器・灯明皿を含む）や炮烙・蛸壺、施釉土師器受付皿（灯明皿）、唐津窯碗・大鉢、肥前系京焼風碗、嬉野窯香炉、瀬戸美濃窯皿、丹波窯火入れ、須佐窯擂鉢、波佐見窯碗・皿・鉢、漳州窯青花碗・五彩皿などが出土している。

ＳＫ302は、土師器皿・炮烙、嬉野窯皿、瀬戸美濃窯碗、須佐窯擂鉢などが出土している。

ＳＫ303からは、土師器鉢、肥前系碗、嬉野窯皿、波佐見窯碗・皿・仏飯具などが出土したほか、ＳＫ303をはじめ複数の遺構や整地層などから出土した破片が接合した資料に、唐津窯刷毛目文鉢243がある。

ＳＫ308から土師器皿などが出土している。254は墨書土器である。底部内外面に墨書がみられるが、書かれている内容は不明である。内面は無造作に線が重ねているようにもみえ、文字あるいは記号などを意識したものではない可能性も考えられる。

ＳＸ301には、土師器皿（灯明皿を含む）、唐津窯碗・鉢、嬉野窯皿、丹波窯擂鉢、須佐窯擂鉢、波佐見窯碗・皿・徳利・仏飯具などがある。

ＳＸ302は、土師器皿・蛸壺、瓦質土器火舎、嬉野窯皿、瀬戸美濃窯皿、京焼系鉢、備前窯鉢、須佐窯？擂鉢などがあり、275や277はＳＸ303との接合資料である。277は漳州窯青花盤で口縁部や体部は一部のみの残存であるが、見込みに不死鳥文を描く底部はほぼ完存している。

ＳＸ306やＳＸ316、整地層から出土した破片が接合した278は波佐見窯皿で、見込みに岩鳥文を描いている。

ＳＸ308は、土師器焼塩壺、嬉野窯皿、瀬戸美濃窯鉢、波佐見窯皿のほか、産地不明の磁器小壺が出土している。

ＳＸ316は大量の遺物が出土した。第２章で触れたように２つの遺構が切り合っていた可能性も考えられるが、出土遺物に顕著な時期差が認められないため、一括して図72～74に掲げた。土師器皿（灯明皿を含む）、施釉土師器灯火具、唐津窯碗・鉢・大鉢・擂鉢、肥前系京焼風碗・香炉、嬉野窯皿、備前窯皿・擂鉢、丹波窯火入れ・甕、瀬戸美濃窯擂鉢、肥前窯白磁小坏、波佐見窯碗・皿・坏・小坏・徳利・猪口・仏飯具、備前窯皿・擂鉢、漳州窯青花碗などが出土している。

ＳＸ318・ＳＸ320からは、土師器炮烙が出土している。

ＳＸ323からは、瀬戸美濃窯片口鉢、須佐窯擂鉢、初期伊万里皿、波佐見窯皿、漳州窯五彩盤が出土した。

ＳＸ324では、唐津窯皿、瀬戸美濃窯鉢、京焼系皿、波佐見窯碗が、ＳＸ352では、肥前窯碗、肥前系京焼風碗、須佐窯擂鉢、波佐見窯仏飯具などが出土している。356の底部外面には墨書がみられる。

ＳＢ305からは、土師器皿や壺と思われる産地不明陶器などが出土している。

ＳＰ301出土の361は胞衣壺に転用されていた土師器蛸壺である。

そのほか第３遺構面上で出土した丹波窯擂鉢362を図76に掲げた。

（５）第３遺構面ベース層

第３遺構面の基盤となる層から出土した遺物を図76に掲げた。

東部では、土師器焼塩壺蓋、初期伊万里碗、丹波窯甕などがあり、273は体部外面に鎬を施し、「福」字を縦に３字ずつ等間隔に配置するものである。

中央部では、土師器三足付皿、唐津窯碗、産地不明陶器瓶、磁器水滴などが出土している。

（６）第４遺構面

ＳＸ403からは、土師器皿、肥前窯筒茶碗・壺、瀬戸美濃窯香炉、波佐見窯碗・皿などが出土している。

ＳＢ403からは、唐津窯皿・鉢などが出土している。

第４遺構面出土遺物については、中国製磁器（景徳鎮窯、漳州窯）が16世紀～17世紀初め、国産陶磁器は17世紀前半頃のものと考えられる。

（７）第４遺構面ベース層

第４遺構面の基盤となる層としては、ＳＢ401やＳＢ402といった遺構検出地区にあたるものと、その他の基盤層の部分で出土したものがある。

ＳＢ401ベース層からは、瓦質土器火舎、唐津窯碗・皿、漳州窯青花碗・盤、景徳鎮青花碗、龍泉窯碗などある。龍泉窯の青磁碗は15世紀後半、景徳鎮窯青花碗は16世紀代、漳州窯青花は16世紀末から17世紀初め、唐津窯は17世紀第１四半期のものに比定される。

ＳＢ402ベース層には、土師器皿、唐津窯皿などがある。唐津窯の376は皮鯨手と呼ばれるもので17世紀第１四半期に、283の白釉皿は同第２四半期に比定される。

そのほか東部のベース層では漳州窯白磁皿が、中央部では唐津窯皿、瀬戸美濃窯の可能性のある小天目碗、龍泉窯碗などが出土している。

以上のベース層出土遺物は、龍泉窯の青磁碗は15世紀後半、唐津窯や瀬戸美濃窯は、17世紀代頃と考えられる。

（８）第４遺構面造成層

上記の第４遺構面ベース層の下位に位置する造成層からも多くの遺物が出土している。大規模な造成が行われた中央部や西部でその傾向が顕著で、中央部では、土師器皿・炮烙、唐津窯皿、備前窯花生、中国製磁器皿などが出土している。西部では、丹波窯火入れ・片口鉢・擂鉢、肥前窯の可能性のある碗、肥前窯皿などが出土している。

（９）第５遺構面

ＳＤ501からは漳州窯白磁碗、朝鮮王朝陶磁船徳利底部片が出土している。いずれも16世紀末～17世紀初め頃のものと考えられる。

ＳＫ502からは、波佐見窯白磁碗が出土している。17世紀後半のものである。

中央部落ち込みからは、漳州窯青花碗が出土している。16世紀末～17世紀初め頃のものと考えられる。

(10) 特殊遺物

〇墨書土器

土師器皿・蛸壺など約20点に墨書が認められる。判読不明のものも多いが、土師器皿については、ＳＫ301出土の220は「の」、精査中出土の395は「八」、396は３行以上縦書きで、「天道□天徳ヵ□」と読める。磁器仏飯具の底部外面にみられる354は、「大佛□」であろう。

〇焼塩壺

全体で約20点出土している。第１・２遺構面からの出土は少なく、整地層および整地層（下）として取り上げたものが多いほか、第３遺構面以下の出土が主である。大半は身であり、蓋は第３遺構面ベース層出土の363（小川分類ア類①）、１点のみである。身については、口縁部の形態がわかるものについては、大半が体部からそのまま口縁に至る小川望氏の分類のⅠ類で、Ⅱ類の口縁形態をもつものは２点のみであった。整地層から出土した144の体部外面には「泉湊伊織」の刻印が認められる。また整地層（下）出土の１点も、欠損しているが、残存する体部外面に「□伊ヵ織ヵ」の刻印がある。小川氏の研究によれば、焼塩壺の生産者（＝壺塩屋）には藤左衛門系、泉州麻生系、泉州磨生系の３系統をはじめとする複数の系統があり、「泉湊伊織」の刻印は、藤左衛門系の生産によるもので、1730年頃からみられ始め、1740年代から1800年代までコップ形の焼塩壺の刻印の主流として盛行するものである[(2)]。上記の刻印をもつものはいずれも整地層（整地層）からの出土であり、時期的には上記の盛行期間の中には収まるものと考えられる。

そのほか、144やＳＢ209ベース土出土の完存品171の内面には布目痕が残る。

〇水滴

ＳＸ113からまとまって出土しているほか、ＳＸ207出土の127や、ＳＫ303の251、第３遺構面ベース層出土の369などがある。多くは直方体状の形態のものであるが、ＳＸ113には特殊な形態をもつものも含まれるほか、369も兎を表現する。

〇鬢水入れ

第１遺構面遺構（ＳＫ113、ＳＸ106）、第２遺構面遺構（ＳＸ127）、整地層などから、計12点出土している。土師器、施釉土師器、磁器、陶器のものがあるが、完存するものはない

小結

以上、各遺構から出土した陶磁器等について記してきたが、今回の調査で出土した陶磁器は、大きく国内産の陶器・磁器、外国産（輸入）陶器・磁器に分けられる。

輸入陶磁器では、中国製磁器である景徳鎮窯青花や漳州窯青花が小片も含めると一定量含まれ、その他にも朝鮮王朝陶磁、中国製青磁やベトナム製品もわずかながら含まれる。漳州窯青花のうち275の盤は、口縁部は一部しか遺存していないが、不死鳥文を描く見込み部分はほぼ完存しており、貴重な資料といえる。これらは国産陶磁器よりも古い年代を示す。そのほか産地不明としたものの中にも外国産の製品が含まれている可能性も考えられる。

国内産陶器のうち、唐津窯の製品については、碗や皿に砂目のものがみられる。鉢には、二彩手や三島手のものがあり、合わせ口で窯詰した際の痕跡が残る。擂鉢も数は少ないがみられる。

嬉野窯の製品は、銅緑釉をかけ、見込みを蛇の目釉剥ぎした皿が目立つほか同様のつくりの碗もみられる。ほかに、口縁を輪花状につくるやや大型の皿もあり、珍しい器形といえるだろう。また透明釉をかけて同様に製作した皿もみられる。18世紀前半の製品が多い。

京焼系あるいは京焼風と呼ばれる碗も一定量みられる。高台内に円刻とともに銘がみられるのが一般的で、今回の確認例では、「清水」「小松吉」、「木下弥」などのほかＳＸ316出土の289では円刻が２重で、加えて逆Ｌ字（あるいは長方形）の区画内に「下一ヵ」の銘がみられ、またそのほかにも記号状で判読不明な銘もみられた。

備前窯の製品には、皿（灯明皿）や甕、擂鉢、蓋がみられる。

丹波窯では、火入れや甕、壺、擂鉢などの製品がみられる。

そのほか、神戸市内では現段階では兵庫津遺跡のみで確認されている、須佐窯[3]の製品と考えられる擂鉢が少量ながら出土している。

註

（１）当調査出土の陶磁器等については、生産地や時期の比定など森村健一氏よりご指導を得ました。記して感謝致します。

（２）ただし当時の泉州（大阪府南部）産の焼塩はブランド品であるため、刻印をもつ焼塩壺も含め各地で模造された場合もあることを森村健一氏よりご教示を受けた。記して感謝いたします。泉州で生産された焼塩壺かどうかを正確に判断するためには、小川氏が述べるような胎土の特徴をもつかどうかについて分析を行うなどが必要であろう。

（３）当調査出土の須佐窯擂鉢については、佐伯純也氏より種々ご教示を得ました。記して感謝申し上げます。兵庫津遺跡における須佐窯擂鉢と考えられる資料については、第42次調査の報告書において阿部功氏により注意されて以来、その後の調査で少しずつではあるが資料が増加しつつある。ただし、確実に同窯の製品かどうかについては、生産地出土の資料との照合作業などが必要である。たとえば山陰地方出土の須佐窯擂鉢には底部外面に叩き痕がみられるものが一定量存在するというが、当遺跡出土の底部には、管見の限りでは認められない。今後もさらに調査・検討を加えたい。

第２節　瓦塼等

今回検出した各遺構や整地層等からは、瓦塼類も多く出土している。このうち41点を図化し、図78～80に示した。図78は軒丸瓦、図79は軒平瓦・軒桟瓦、図80は道具瓦等である。

（１）軒丸瓦

軒丸瓦は瓦当部文様を確認できたものはすべて巴文で、出土資料中に文字瓦は認められない。遺存状況により断定できないものもあるが、遺存状況から判断すれば、おそらく全て三巴文と考えられる。さらに、珠文を確認したものが多く、逆に明らかに珠文をもたないものも認められないことから、おそらく軒丸瓦の文様は、全て連珠三巴文と考えられる。巴の巻の方向については、頭から尾の方向でとらえることとするが、確認できたものは全て左巻きである。また巴の尾部が隣の巴の頭部に接するものは、撹乱出土資料を除き認められない。内区文様と外区文様を画する圏線については、出土資料中に認められない。以上の状況は、今回出土したものの大半が江戸時代に属するものと考えられることと整合性が認められる。

図78においては、出土遺構の検出位置や時期に関わらず、珠文が小さく、かつ珠文間の間隔が広いタイプのものを上部に、次に、珠文の数が多く、珠文間の距離の狭いもの、さらに下段には珠文が前２者に比べて大きく珠文間の間隔が前２者の中間的なものである、江戸時代に通有にみられるものを配置した。最下段の２つは、巴が片流れ状を呈するものであるあくまで珠文の特徴から、図の上部はやや古い様相をもつもの、下段は上部に比して新しい様相をもつものと考えたものである。398には珠文部分に笵キズが認められる。

（２）軒平瓦・軒桟瓦

軒平瓦の瓦当文様については、主文様については、判明するものは三葉文と橘文である。脇文様は大半が唐草文で、そのうちの大半は子葉が３反転するものであるが、わずかに上向きのみのものや下向きのみものがある。橘文と唐草文の組み合わせによる、いわゆる橘唐草文をもつものには、萼の先端が二股に分かれるものと分かれないものがあるほか、両端の子葉が、明確に分岐してＹ字になるものと、分岐が明確ではなく丸みをもったコブ状を呈するもの、全く分岐していないものがある。

図79は軒平瓦で、圏線をもつ412が室町～南北朝期頃に遡る可能性が考えられ、他の軒平瓦よりも古い様相をもつものと判断される。413～416は主文様（中心飾り）の状況は不明ながら反転せず一定の方向を保つ唐草文を脇文様とする。418～420は、三葉文を主文様とし、３反転する唐草文を脇文様とするもので、主文様の遺存しない417も同じ一群であろう。421、422主文様ははっきりとしないが唐草文を脇文様とする。423・424は上部に装飾をもつ三葉文を主文様とし、脇文様は２反転する突線による雲文で表現する。この２点の瓦当文様は出土資料中で異彩を放っており、現在のところ神戸市内では類例は確認できない。大阪府堺市大安寺本堂に423と同文で近似した法量をもつ軒平瓦が使用されていたことが山崎信二氏によって紹介されている。また、多少の文様の退化傾向は認められるが、同文の軒平瓦が堺環濠都市遺跡の複数の地点で出土している。報告された資料は堺環濠都市遺跡においても少ないが、上記の出土例の存在から、現段階では堺の瓦ないし瓦工人と関係をもつものであると考えておきたい。

軒桟瓦は桟部と平瓦部の接合状況の判明するものは、全て右軒桟瓦である。この場合、建物側からみた場合に右に桟が位置するものとする。通常の桟瓦も同様に、右側に桟部がつくもののみで占められるものと考えられる。小丸付軒桟瓦と、鎌形軒桟瓦がある。小丸瓦当の文様は、遺構内出土のものでは明確ではないが、撹乱からは連珠三巴文や無文のものが出土している。

無文のものは、平瓦部も無文であり、明治期以降に下るものと考えられる。平瓦部の文様は、平瓦と同様の橘唐草文が主流で、わずかに認められる蛇の目文や無文のものは明治期以降のものと考えられる。429・430は、鎌形軒桟瓦である。

（３）その他の瓦

図80には、小菊丸瓦２点、丸瓦２点、塀瓦１点、引掛け（軒平）瓦１点、雁振瓦１点を掲げた。

431・432は小菊丸瓦で、いずれも二重菊で、432が８葉で、おそらく431も８葉であろう。

433・434は丸瓦で、ともに凸面はヘラケズリを施すが、434は広端部側をナデ消す。433の凹面はコビキＢ後内叩き、玉縁部に布目痕が残る。側縁や玉縁部凹面側に面取りを施す。

435は塀瓦である。今回の出土資料中に、塀瓦は一定量含まれている。

（９）刻印瓦

544はおそらく軒桟瓦であるが、小丸瓦部あるいは鎌形を欠失している。平瓦部の瓦当文様は蛇の目文である。瓦当右端部に「瓦吉」の刻印をもつ。類例としては、兵庫区楠・荒田町遺跡第54次調査出土の瓦に「明石　瓦吉」の刻印をもつものが確認されている。当調査で出土したものは明石の文字が認められないため、同一の生産者によるものかは断定できない。なお明石の瓦製造業者のなかに「瓦吉」の屋号等を使用していたものは現段階では特定できていない。本例についても製造業者等の特定は困難である。時期についても特定できないが、焼成の状況や瓦当文様が蛇の目文であることなどから近代以降のものと想定しておきたい。

545は凸面に刻印をもつ。刻印は、長方形区画内を区画線で上下に分け、上部に右から横書きで「谷川」、下部に縦書きで「大野菊製」と記す。下部の刻印はやや不明瞭である。おそらく丸瓦であろう。凹面にはカキメを施す。谷川瓦は大阪府岬町に所在する瓦生産地である。

546は瓦積井戸６の井戸枠に用いられていた井戸瓦で、凹面上部に刻印をもつ。刻印は、長方形区画内を横線で上･下に区画し、上段に「専売特許／二、一、一、二、三、五」を二段書き（いずれも右から左へ横書き）し、下段に三行縦書きで、右から「神港」、「山中製」、「多六」と記す。この井戸瓦は通有の井戸瓦と異なり、設置した際に内側から見て、上辺と左辺に突起を設けて凸状とし、残る下辺と右辺を逆に凹状に窪ませている。通有の井戸瓦は平坦面通しを組み合わせるが､この瓦は凸面と凹面が強固に組み合うものとなっているため､構造上強固なつくりとなっている。このようなつくりの井戸瓦を用いていることの最も重要な意味は、標高０ｍ以下の地下水を井戸水として利用する際に海水の侵入を防ぐことにあったものと想像される。この特殊なつくりをもった井戸瓦の開発に際して特許を取得したものと考えられる。ちなみに、専売特許条例は明治18年〔1885〕４月18日に公布・施行されている。特許取得第１号は同年８月14日に認定されているようである。今回特許番号が判明しているものの検索を試みたが、結果として特許番号から製造業者を特定するには至らなかった。製造業者である「山中」が屋号（の一部）なのか、会社名（の一部）を示すのかについても明確にしえなかった。ただし「神港」の文字からは神戸市内に生産地あるいは会社（工場を含む）が所在した可能性は高いものと考えている。

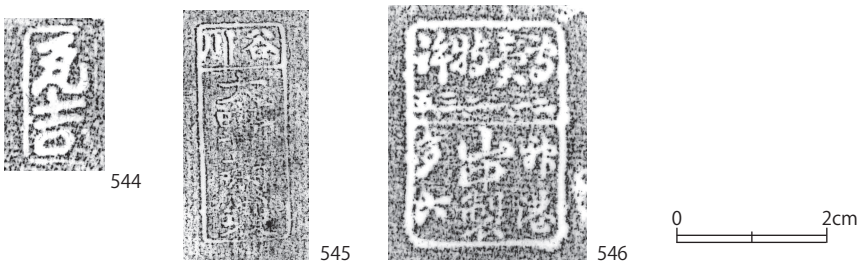


図49　出土刻印瓦拓影

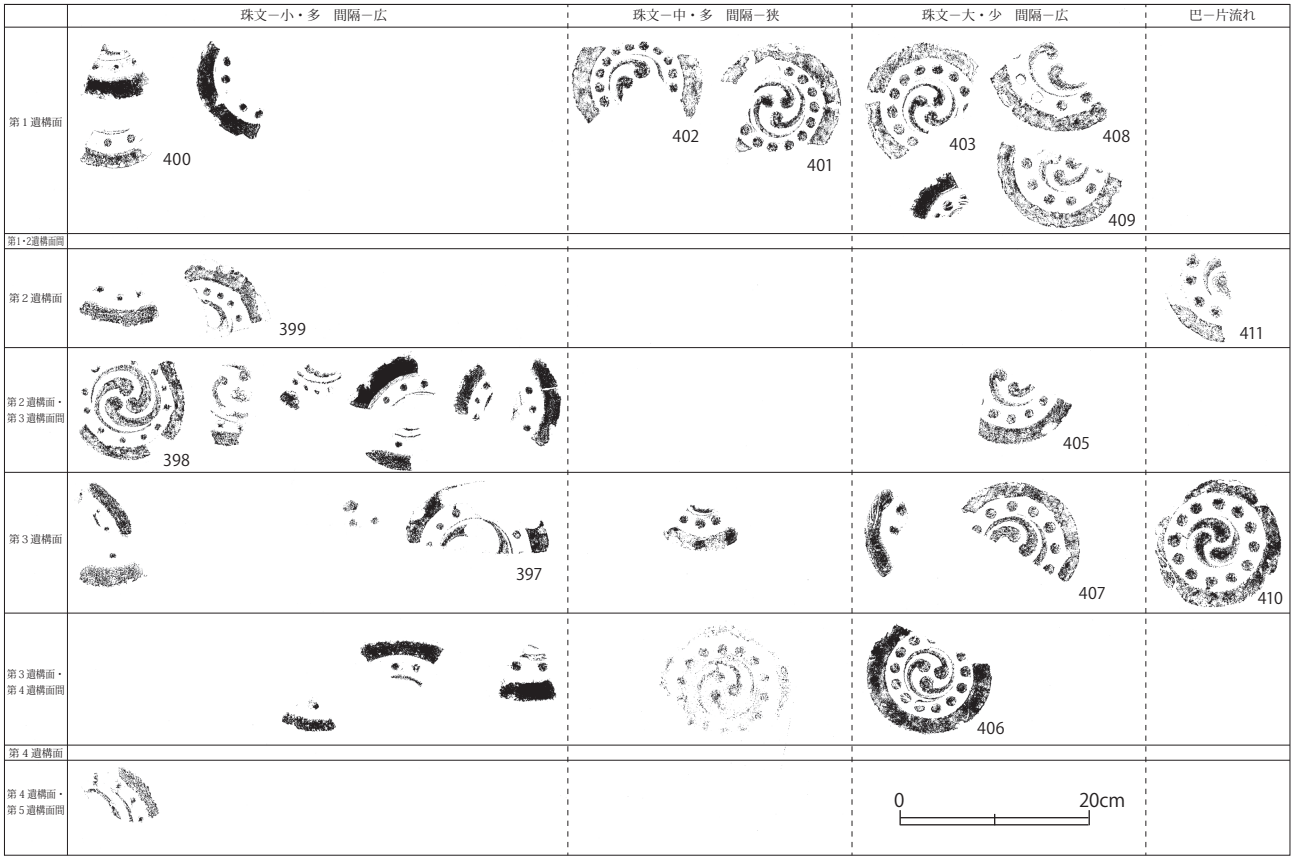


図50　各層位出土軒丸瓦拓影

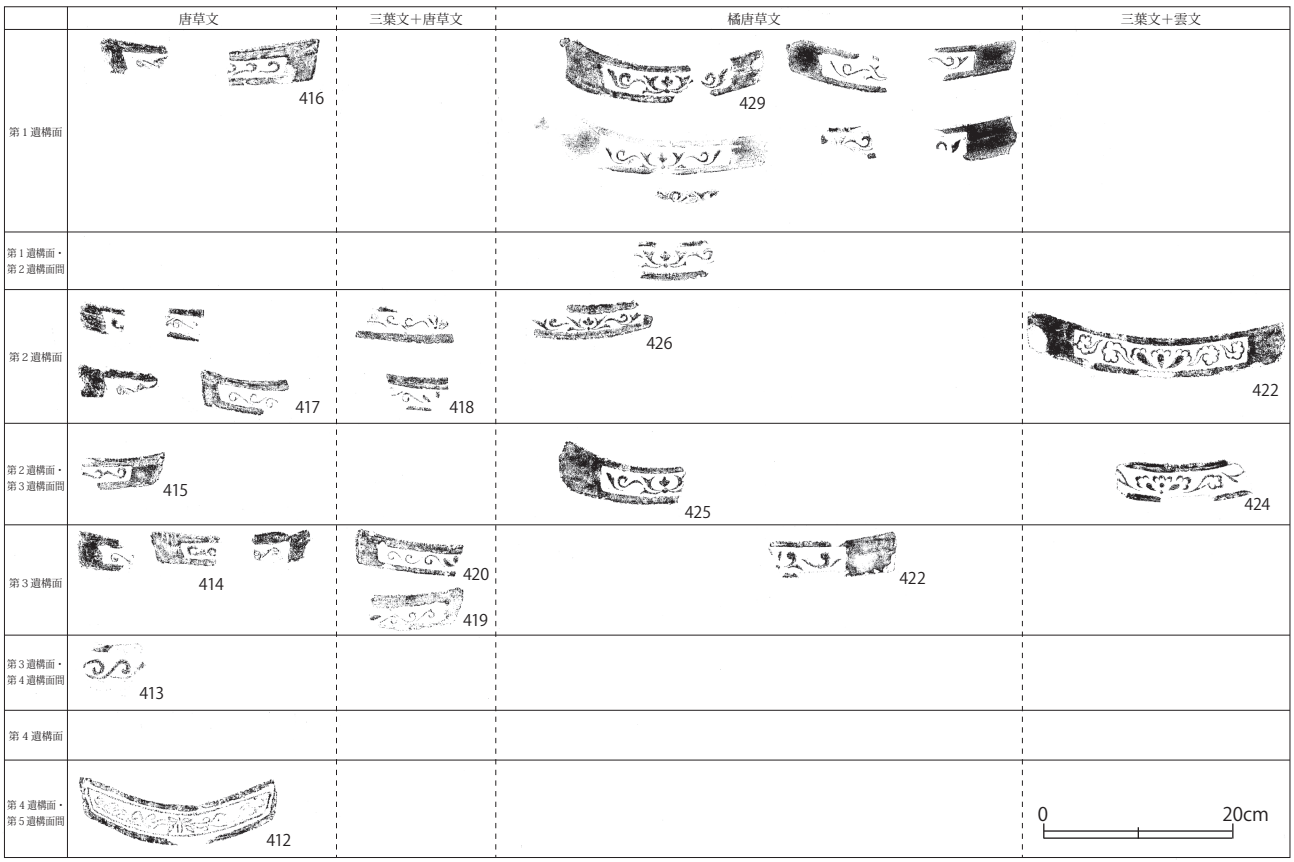


図51　各層位出土軒平瓦拓影

第３節　土製品

当調査で出土した土製品には、土錘、土人形、飯事道具、箱庭道具、芥子面、土鈴等がある。図化を行ったものは少数であるが、以下、個別に概略について触れたい。

（１）土錘

今回の調査で検出した遺構は概ね江戸時代の中で納まる時期のものであり、各遺構面から出土した土錘に、時期による形態差は認められない。全時期を通じて、管状土錘と呼ばれるものが多数を占める。その他では、有孔有溝のタイプが少量含まれる。

管状土錘は大きさおよび太さにより、大まかに太・長、太・中、太・短、細・短の４タイプが認められる。以上の４タイプは時期による形態変化に乏しいものであるため、形態から時期を求めることはできない。なお、太・長～太・短タイプの分類は、完形で遺存していないものも多く、基準値を設定した明確な分類ではなく、あくまで便宜的に識別したことを断っておきたい。

有孔有溝タイプはこれまでの研究から、鎌倉時代から室町時代以降に認められるものである。

表２　出土土錘集計表

		第１遺構面	第２遺構面	整地層	第２遺構面ベース層	第３遺構面	第３遺構面ベース層	第４遺構面	第４遺構面ベース層	第４遺構面造成層	第５遺構面	精査中等	撹乱	合計
有孔有溝土錘		1	7		2	5	7			4		2	1	29
管状土錘	太・長タイプ	1		2			1		1			1		6
	太・中タイプ	4	8	8		6	3			1		5	1	36
	太・短タイプ	16	97	37	10	14	51	4	13	12		22	11	287
	細・短タイプ	25	208	52	35	62	55	4	2	11		34	20	508
合計		47	320	99	47	87	117	8	16	28	0	64	33	866

（２）土人形

総点数で、64点を数える。

内訳は、最も多いのは仏像で、台座のみの残存５点を含めると計33点（第１遺構面に伴うもの２点、第２遺構面に伴うもの３点、整地層中10点、第２遺構面ベース層２点、第３遺構面に伴うもの４点、第３遺構面ベース層４点、精査中６点、撹乱内２点）を数え、全体の半数を占める。そのほかには、西行５点（ＳＥ103：１点、ＳＢ205：１点、整地層２点、ＳＫ352：１点）、大黒天３点（ＳＸ112、ＳＢ208、撹乱内）、恵比寿天３点（ＳＸ115断面検出中、ＳＫ312、ＳＸ316）、人物３点（ＳＢ204：１点、精査中１点、撹乱内１点）、馬上人２点（ＳＢ205、ＳＢ305裏ベース層）、地蔵２点（ＳＢ205ベース層）、力士３点（ＳＸ113：２点、ＳＸ124：１点）、武士１点（整地層）、虚無僧１点（整地層）、相撲〔大黒天・布袋天〕１点（ＳＫ352）、鯛２点（ＳＫ115掘形、ＳＢ205ベース層）、亀２点（ＳＸ127、ＳＢ201裏）、犬１点（ＳＸ113、）、牛１点（ＳＫ109）、馬１点（整地増）、猿１点（ＳＸ301）、鳥１点（撹乱内）である。

（３）飯事道具

ＳＸ113からややまとまって（18点）出土するなど計64点出土している。

特徴的なものとして硯がある。ＳＸ113から９点出土したほか計11点あり、そのうち５点は墨が付着しており、使用痕と判断される。この場合に単に飯事道具の一つとして使用されたことも十分考えられるが、一方で小型の携帯品として使用された可能性も考えられる。今後も類例の調査に努めたい。ＳＸ113では文箱も出土しているが、こちらは筆を置いた状態を模しており、飯事道具であろう。そのほかでは、壺、甕、擂鉢、漏斗、碗、皿、注口付容器や徳利に加え、土師質や瓦質の羽釜など江戸時代の遺跡において通有にみられる飯事道具類が大半を占める。ほかに、三方も１点出土している。羽釜以外のものでは、土製のもののほかに磁器製のものも一定量含んでいる。

（４）箱庭道具

計６点出土している。

橋２点（ＳＢ206、撹乱内）、灯籠２点（ＳＸ113、整地層（下））、鐘楼１点（ＳＥ102）、船１点（整地層）である。

（５）芥子面

計４点が出土した。

亀（ＳＸ103）、大黒天（ＳＸ124）、人物（顔）（ＳＢ201床面）、魚（撹乱内）と考えられる。そのほか、芥子面の型の可能性が考えられる土製品がＳＸ112より１点出土しているが、内部（凹面側）の文様は明確ではない。

（６）土鈴

４点が出土している。うち１点は撹乱内からの出土で、１点はＳＫ128、他は第３遺構面の遺構（ＳＸ316、ＳＸ351）および整地層からの出土である。

197は、ＳＸ351下部で出土したものである。鈴に中で音を立てるための粘土の小塊も２点（もと１点の可能性もあり）遺存している。

第４節　石製品

石製品には、石、硯、石臼、浮子などがある。ほかに石製の遺物として五輪塔などの石造物があるが、それらについては次節に記述することとし、ここでは硯、砥石、石臼について述べる。

（１）硯

今回の調査で出土した硯は、計７点である。これ以外に、後述する砥石には硯から転用されたものがあったと考えられる。

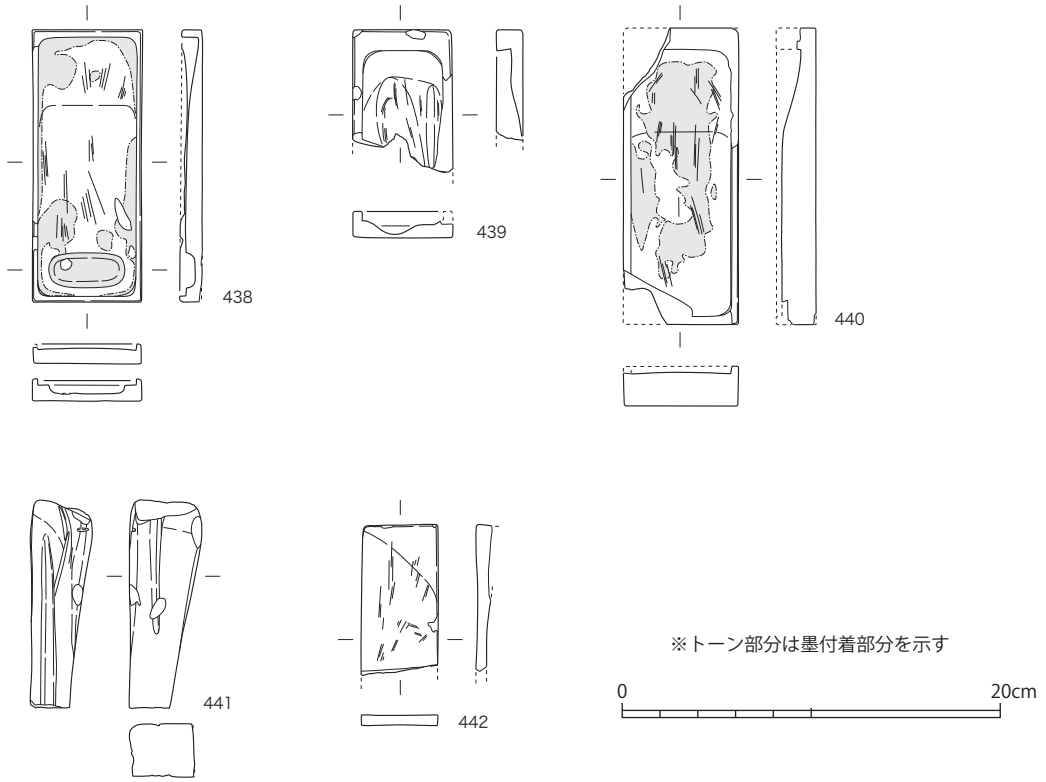


図52　出土石製品実測図

438は、ＳＢ201焼土面上面出土のもので、ほぼ完形である。陸部端に楕円形の窪みをもつ。

439は、ＳＢ201裏焼土面直上出土のもので、１/２程度が残存している。

440は、撹乱層出土であるが、一部を欠損するものの、ほぼ全体の形状の判明するものである。

（２）砥石

可能性のあるものも含め、34点が出土している。通常みられる大きさのもの以外に、大型の礫を使用しているものもある。また、硯を転用したと考えられるものも数点含まれる。２点を図化した。

441はＳＸ131出土のもので、両小口面を除く４面に使用痕があり、うち３面には溝状の磨り切り痕も残る。

442はＳＢ201裏焼土面直上出土のもので、欠損しているが、残存部分については小口面や側面、表面、裏面に使用痕が認められる。

（３）石臼（写真図版46）

２点出土している。第３遺構面ベース層および、ＳＢ402からの出土で、前者は上臼で、後者は下臼である。

第５節　転用石造物

計20点出土している。多くは一石五輪塔および五輪塔で、多いものは五輪等の火輪で、計６点出土している。また一石五輪等の火輪・水輪部分が１基、火水地輪部分が計２基出土している。

ＳＸ205では、一石五輪塔（火輪･水輪））と五輪塔（火輪３基）を組み合わせて使用している。後者は倒立させ、底面の平らな部分を上側としており、通路などの用途を想定している。

そのほか、ＳＸ315には五輪塔（火輪）、一石五輪塔、その他石造物が、ＳＸ354には五輪塔（水輪）が石組みの石材に転用されていた。ＳＢ302にも五輪塔（火輪）が転用され、またＳＸ116には転用石かは断定できないが、切石が用いられていた。ＳＢ401内では加工石が出土している。その他の石造物の大半は遺構面を形成していたベース層や造成層から出土している。

第４遺構面造成層から出土した五輪塔の火輪には、４面とも、一字ずつ梵字が刻まれている。文字は、「ﾗｸ（ラク）」、「ﾗ（ラ）」、「ﾗｰ（ラー）」、「ﾗﾝ（ラン）」であり、それぞれ北、東、南、西へと結界する意味をもつ。

第６節　煉瓦

東部で検出した瓦積井戸１の埋め土の中に刻印をもつ煉瓦を見出した。この煉瓦の刻印は、「ワ」に近い文字で、平手の両面のほぼ中央に刻まれている。煉瓦の法量は、22.8㎝×10.8㎝×6.0㎝を測る。

神戸市内では、現存する異人館などの洋風建築の建築部材や、酒蔵群における各施設などに使用されたものが発掘調査の際に出土しており、これらの煉瓦に残された刻印などから、大阪府岸和田市や同貝塚市等で生産された煉瓦の資料が近年増加しつつある。当資料に残された刻印と同じ刻印は、現在のところ、神戸市内および近隣では確認されていないため、この刻印から産地を推定することはできない。

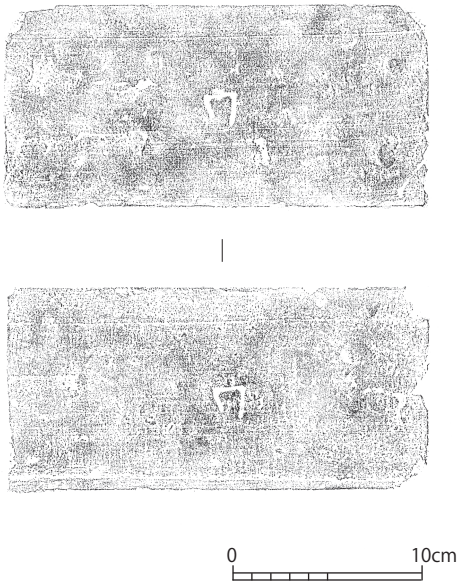


図53　出土煉瓦拓影

第７節　金属製品

兵庫津遺跡における町屋遺構の調査では金属製品の出土数が多く、今回の調査でも多くの出土を見ているが、刃物や釘などの鉄製品と煙管、銭貨など銅製品がそのほとんどを占める。図55に代表的なものを図示し、写真図版47～49に写真を掲載した。443～468、526、527が鉄製品、469～525、528が銅製品である。

443は全長23.5cm、刃幅5.6cmの菜切り包丁である。茎端部はやや斜めの一文字に仕上げている。444、445は片刃の出刃包丁である。444は先端のみの破片であるが、11.6cm以上の大型品、445は全長10.1cmを測る小型品である。446も片刃の包丁であるが、全長19.3cm以上で刃幅は3.2cmと細長い。

447、448は小柄である。447は柄が残る全長20.1cmの完形品である。柄の佩側面には草花文が彫金で表現される。448は全長19.8cmの小柄が刀身のみ出土している。

449～457は鉄釘で、449～452は船釘である。449、450は板の長辺同士を結合するための縫い釘、451、452は材平坦面を側面に結合するために用いられ、通り釘と呼ばれる。

458は鉄製の火箸である。横断面は径5.4mmを測る円形で、残存長17.5cmを測る。

459は金槌で、頭部片方が鏨状を呈する。全長8.7cmで、1.8cm×7.7mmの柄穴が穿たれる。

460は握り鋏で、先端と把握部を欠損する。残存長5.2cmを測る。

461は鉄鍋の耳破片である。縁からの高さ1.8cmを測り、径8.2mmの弦掛け穴を穿つ。

463～465は釣針で、高さ2.4～2.6cm、ふところ（先端～軸間）1.2～1.3cmと規格性が認められる。

466～468は鉄銭であるが、銭文は何れも明らかでない。直径は2.7cm前後を測る。

469～471は銅煙管の雁首である。いずれも銅板を筒状にまいた胴に火皿を溶接している。469は比較的首の部分が長く、470、471と短くなる。これは編年的推移を表す属性である。

472～474は煙管の吸口で、それぞれ形状が異なる。474には毛彫りと魚子打ちが施される。

475は簪で、頭部に扇形の飾りを表現している。

476は切羽で、挿入孔は長2.5cm×幅7.2mmを測る。

484は紅猪口で全体につぶれており、径2.9cm以上を測る。鉢と高台は別作りで、互いを軸により固定する。

486～489は用途不明の銅製品である。

490～525は銅銭である。銭文が分かるものについて遺構時期ごとの出土数を図54に示した。初期に使用されていた渡来銭から古寛永銭、新寛永銭と割合が変化する様子が看取できる。

また写真図版49に掲載したように、金属製品製作に関する、鉱滓（529～531）、取鍋（532）、鞴羽口（533・534）、炉壁材（535～539）等の遺物も出土している。

表３　出土銅銭一覧（写真掲載分）

番号	出土層位	銭種	年代（西暦）
490	第3遺構面ベース層	開元通寶	唐　621
491	第4遺構面造成層	開元通寶	唐　621
492	第4遺構面造成層	咸平元寶	北宋　998
493	ＳＢ202土ふるい中	景德元寶	北宋　1004
494	第3遺構面ベース層	祥符通寶	北宋　1009
495	第4遺構面ベース層	祥符通寶	北宋　1009
496	第4遺構面ベース層	天聖元寶	北宋　1023
497	第4遺構面造成層	皇宋通寶	北宋　1039
498	第3遺構面ベース層	皇宋通寶	北宋　1039
499	第3遺構面ベース層	治平元寶	北宋　1064
500	第4遺構面精査中	治平元寶	北宋　1064
501	撹乱内精査中	熙寧元寶	北宋　1068
502	第4遺構面ベース層	元豊通寶	北宋　1078
503	ＳＢ202床面	元祐通寶	北宋　1086
504	ＳＢ201焼土面直上	紹聖元寶	北宋　1094
505	第3遺構面ベース層	紹聖元寶	北宋　1094
506	第4遺構面ベース層	聖宋元寶	北宋　1101
507	ＳＢ201内イロリ（新）	洪武通寶	明　1368
508	瓦積井戸内	寛永通寶（古）	
509	撹乱内	寛永通寶（古）	
510	撹乱内	寛永通寶（古）	
511	精査中	寛永通寶（古）	
512	ＳＸ116下層	寛永通寶（古）	
513	ＳＸ117の西側精査中	寛永通寶（古）	
514	炭層上面検出中	寛永通寶（古）	
515	ＳＰ201	寛永通寶（古）	
516	ＳＢ202炭層上面検出中	寛永通寶（古）	
517	ＳＢ202焼土面直上	寛永通寶（古）	
518	整地層	寛永通寶（古）	
519	ＳＫ307	寛永通寶（古）	
520	重機掘削中～精査中	寛永通寶（新）	
521	重機掘削中～精査中	寛永通寶（新）	
522	整地層	寛永通寶（新）	
523	ＳＸ207	寛永通寶（新）	
524	遺構面精査？	寛永通寶（新）	
525	第3遺構面ベース層	寛永通寶（新）	

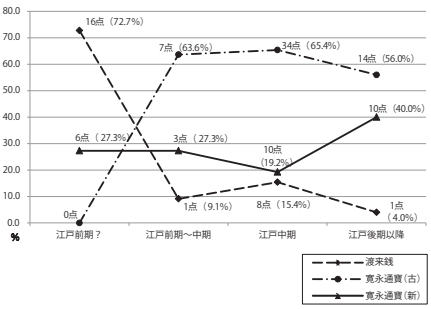


図54　時期別銅銭出土数

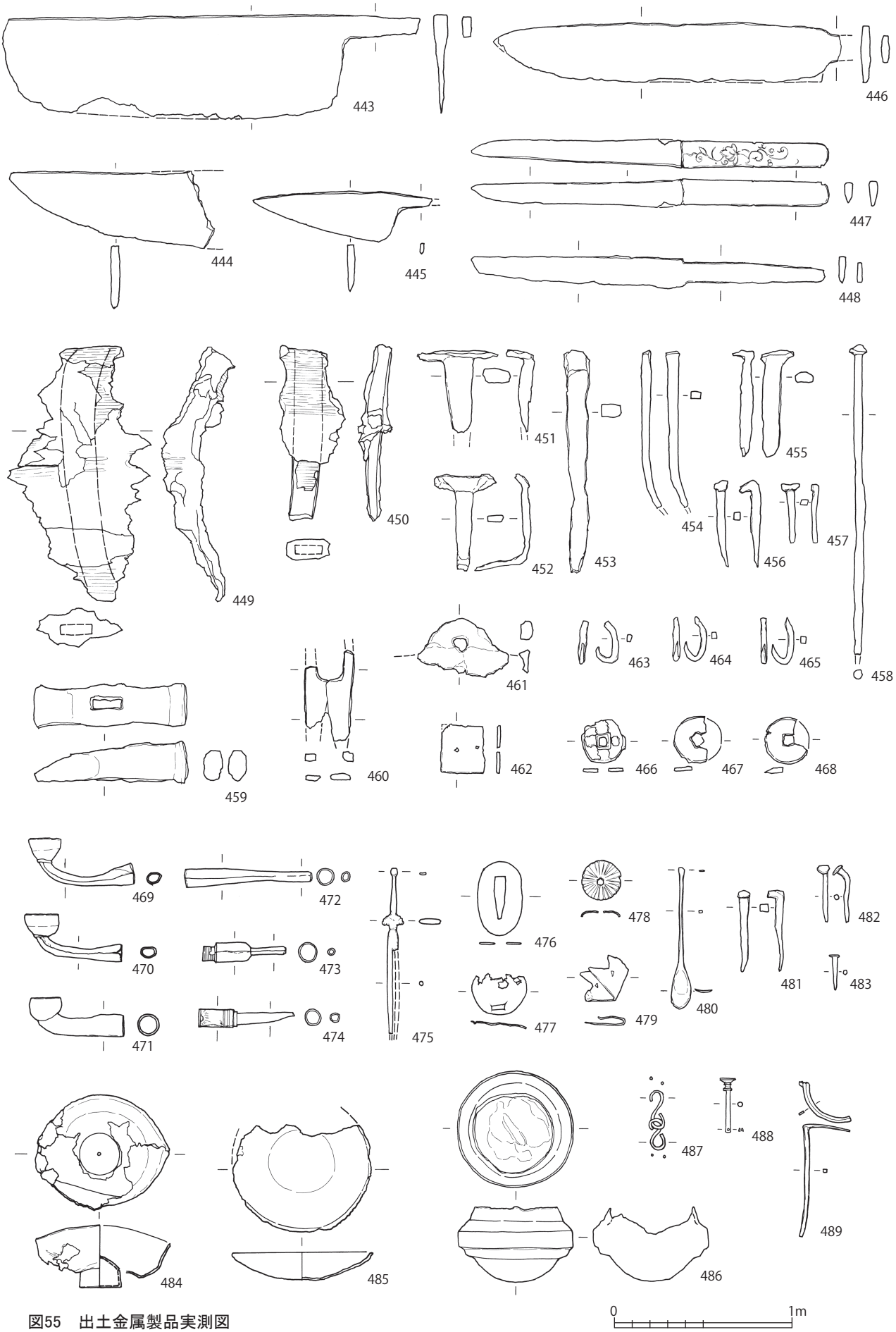


図55　出土金属製品実測図

第８節　兵庫津遺跡第69次調査から出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学海洋学部）

１．概要

兵庫津遺跡では第２次調査以来、第14次調査、第42次調査、第44次調査、第51次調査、第52次調査、第53次調査、第57次調査、第62次調査において、動物遺存体の出土が報告されている。これらの調査において豊富な出土量に恵まれたのは、遺跡のベースが砂層であるため有機物の保存状態が良いことに起因する。

第51次調査では中世の動物遺存体が、その他の調査では16世紀後半～幕末、近代までの近世・近代の動物遺存体が出土している。牛馬骨の加工や肉食の様相、トリガイの剥き身製造や雑魚の消費などの水揚げ地近郊の海産物消費の様相といった、兵庫津における町屋での動物利用が明らかになりつつある。

当調査も例外ではなく、町屋の調査では大量の貝類が出土しており、水産物利用について新たな知見がもたらされる。出土した動物遺存体は、破片数にして988点にのぼり、種類や部位を同定したものは、貝類が最多で384点、魚類255点、哺乳類25点、サンゴ類３点を数える（表４、５）。なお、種類不明の鳥類の上腕骨と思われるものが出土しているが、以下では記載を省略する。

動物遺存体は建物跡、土坑、埋桶、井戸などの遺構から出土しており、各時期の整地層などからの出土もある。共伴する土器類から江戸時代前期から明治期までのものと推定される。なお、町屋建物ＳＢ305の土間において貝層が検出されたものをはじめ、これらの動物遺存体の大半は水洗選別を行って採集したもので、その他は調査中に目視により採集したものである。

２．種類別の特徴

ａ）サンゴ類

キクメイシ科　瓦積井戸２から１点出土している。また、キクメイシ科と思われるものが、ＳＢ202上面焼土層、ＳＸ117から１点ずつ出土している。

ｂ）貝類

アワビ類　ＳＫ115、ＳＫ104、ＳＸ106、ＳＢ305から１点ずつ、計４点が出土している。ＳＸ106から出土した個体はクロアワビであり、その他は種の同定に至らない。いずれも破損しており、計測できないが、大きさに極端な大小は見られない。

キサゴ類　ＳＸ115から８点、ＳＫ112から１点、計９点が出土している。キサゴあるいはイボキサゴのいずれかである。

サザエ　ＳＸ116から３点、ＳＢ305から２点、ＳＫ115、ＳＸ308、ＳＢ202から１点ずつ、計８点が出土している。

タニシ科　ＳＢ305土間貝層から89点、ＳＸ115から２点、計91点が出土している。大きさは、ＳＢ305土間貝層では、殻長約30～50㎜の個体と30㎜に満たない小型個体が混在し、ＳＸ115は小型個体のみである。

ウミニナ科　ＳＢ202上面焼土層から10点、ＳＢ202イロリ、ＳＢ305から１点、計12点が出土している。いずれも被熱した痕跡はみられない。

表４　種名表

刺胞動物門　Cnidaria
花虫綱　Anthozoa
　イシサンゴ目　Scleractinia
　　キクメイシ亜目の一種　Faviina fam., gen. et sp. indet.
軟体動物門　Mollusca
腹足綱　Gastropoda
　古腹足目　Vetigastropoda
　　ミミガイ科　Hiliotidae
　　ミミガイ科の一種　Haliotidae gen. et sp. indet.
　　ニシキウズガイ科　Trochidae
　　ニシキウズガイ科の一種　Trochidae gen. et sp. indet.
　　サザエ科　Turbnidae
　　サザエ　*Turbo cornutus*
　盤足目　Discopoda
　　タニシ科　Viviparidae
　　タニシ科の一種　Viviparidae gen. et sp. indet.
　　ウミニナ科　Batillariidae
　　ウミニナ科の一種　Batillariidae gen. et sp. indet.
　　タマガイ科　Naticidae
　　ツメタガイ　*Glossailax didyma*
　　トウカムリ科　Cassidae
　　ウラシマガイ　*Semicassis bisulcata*
　新腹足目　Neogastropoda
　　アッキガイ科　Muricidae
　　アカニシ　*Rapana venosa*
　　エゾバイ科　Buccinidae
　　バイ　*Balylonia japonica*
　　テングニシ科　Melongenidae
　　テングニシ　*Hemifusus tuba*
斧足綱　Bivalvia
　フネガイ目　Arcoida
　　フネガイ科　Arcidae
　　アカガイ　*Scpharaca broughtonii*
　　フネガイ科の一種　Arcidae gen. st sp. indet.
　　タマキガイ科　Glycymerididae
　　タマキガイ　*Glycymeris vestita*
　カキ目　Ostreoida
　　イタボガキ科　Ostreidae
　　イタボガキ　*Ostrea denselamellosa*
　　マガキ　*Crassostrea gigas*
　　イタボガキ科の一種　Ostreidae gen. et sp. indet.
　　イシガイ目 Unionida
　　イシガイ科　Unionidae
　　イシガイ科の一種　Unionidae gen. et sp. indet.
　マルスダレガイ目　Veneroida
　　ザルガイ科　Cardiidae
　　トリガイ　*Fulvia mutica*
　　バカガイ科　Mactridae
　　シオフキ　*Mactra veneriformis*
　　シジミ科　Corbiculidae
　　ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
　　マルスダレガイ科　Veneridae
　　アサリ　*Ruditapes philippinarum*
　　ハマグリ　*Meretrix lusoria*
脊椎動物門　Vertebrata
軟骨魚綱　Chondrichthyes
　板鰓亜綱の一種　Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet.
　トビエイ目　Myliobatiformes
　　トビエイ上科の一種　Myliobatidoidea
硬骨魚綱　Osteichthyes
　ウナギ目　Anguilliformes
　　ハモ科　Muraenesocidae
　　ハモ属の一種　*Muraenesox* sp.
　　ウツボ科　Muraenidae
　　ウツボ属の一種　*Gymnothrax* sp.
　ニシン目　Cluperiformes
　　ニシン科　Clupeidae
　　マイワシ　*Sardinops melanosticutus*
　　ニシン科の一種　Clupeidae gen. et sp. indet.
　カサゴ目　Scorpaeniformes
　　オニオコゼ科 Synanceiidae
　　オニオコゼ属の一種　*Inimicus* sp.
　　コチ科　Platycephalidae
　　コチ科の一種　Platycephalidae gen. et sp. indet.
　スズキ目　Percidae
　　スズキ科　Percichthyidae
　　スズキ属？　*Lateolabrax* sp.
　　アマダイ科　Malacanthidae
　　アマダイ属の一種　*Branchiostegus* sp.
　　アジ科　Carangiae
　　ブリ属の一種　*Seriola* sp.
　　アジ科の一種　Carangiae gen. et sp. indet.
　　イサキ科　Haemulidae
　　ヒゲダイ属の一種　*hapalogenys* sp.
　　タイ科　Sparidae
　　マダイ　*Pagrus major*
　　タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet..
　　キス科　Sillaginidae
　　キス属の一種　*Sillago* sp.
　　イシダイ科　Oplegnathidae
　　イシダイ属の一種　*Oplegnaths* sp.
　　ベラ科　Labroide
　　ベラ科の一種 Labroidei gen. et sp. indet.
　　タチウオ科　Trichiuridae
　　タチウオ科の一種　Trichiuridae gen. et sp. indet.
　　サバ科　Scombridae
　　サバ属の一種　*Scomber* sp.
　カレイ目　Pleuronectiformes
　　ヒラメ科　Bothidae
　　ヒラメ科の一種　Bothidae gen. et sp. Indet.
　　カレイ科　Pleuronectidae
　　カレイ科の一種　Pleuronectidae gen. et sp. Indet.
　　ウシノシタ科　Cynoglossidae
　　ウシノシタ科の一種　Cynoglossidae, gen.et sp. indet.
　フグ目 Tetraodonitiformes
　　カワハギ科　Monacanthidae
　　カワハギ科の一種　Monacanthidae, gen. et sp. indet.
　　フグ科　Tetraodonitidae
　　フグ科の一種　Tetraodonitidae, gen. et sp. indet.
哺乳綱　Mammalia
　食肉目　Carnivora
　　イヌ科　Canidae
　　イヌ　*Canis familiaris*
　　ネコ科　Felidae
　　ネコ　*Felis catus*
　齧歯目　Rodentia
　　ネズミ科　Muridae
　　ネズミ科の一種　Muridae gen. et sp. indet.
　クジラ目　Cetacea
　　クジラ目の一種　Cetacea fam., gen. et sp. indet.

ツメタガイ　ＳＸ116から16点、ＳＸ308から７点、ＳＢ305から４点、ＳＢ202イロリ、第３遺構面ベース層から２点ずつ、ＳＫ112、ＳＫ113から１点、計33点が出土している。計測できた個体はＳＢ305から出土したもので、殻長24.3㎜、28.4㎜、39.9㎜、51.5㎜と小型個体が多い。また、ＳＸ116のものは、計測はできないが、いずれも小型個体である。

ウラシマガイ　第３遺構面ベース層から１点のみ出土している。

アカニシ　ＳＥ103から４点、ＳＢ305、第４遺構面ベース層から２点ずつ、ＳＫ101、ＳＸ120、ＳＫ121、ＳＫ301、ＳＢ202上面焼土層、ＳＢ204カマド、ＳＸ316、第４遺構面造成層から１点ずつ、計16点が出土している。破損しているものが大部分であり、計測できたものはないが、殻高はおおよそ100㎜前後ないしそれ以上で、それより小型のものが１点のみある。

バイ　ＳＢ305、ＳＸ308から２点ずつ、ＳＢ201上面焼土層から１点、計５点が出土している。

テングニシ　ＳＫ109から２点、ＳＸ308、第４遺構面造成層から１点ずつ、計４点が出土している。

マイマイ類　カタツムリの仲間である。ＳＸ115から１点のみ出土している。

アカガイ　ＳＥ103、ＳＢ305から１点（左）ずつ、計２点が出土している。

タマキガイ　ＳＢ305から２点（左１右１）が出土している。

イタボガキ　第４遺構面造成層から３点（左２右１）、ＳＢ305から２点（左１右１）、ＳＢ202上面焼土から１点（左）、計６点が出土している。

マガキ　第３遺構面ベース層から２点（右）、ＳＸ308から７点（左３右４）、ＳＢ305から５点（左１右４）、計14点が出土している。

イタボガキ科　ＳＢ305から７点（左３右４）、ＳＢ202上面焼土層から５点（左３右２）、ＳＸ122（右）から２点、ＳＸ308（右）、ＳＸ120（右）、ＳＢ201上面整地層（右？）、ＳＢ204焼土面直上（右）、第３遺構面ベース層（左右不明）、第４遺構面造成層（右）から１点ずつ、計20点が出土している。

イシガイ科　ＳＢ305から３点（左２不明１）が出土している。

トリガイ　ＳＢ305土間貝層から47点（左22右25）、ＳＢ202上面焼土層から12点（左６右６）、第３遺構面ベース層（左）、ＳＫ312（左）から１点ずつ計61点が出土している。

シオフキ　ＳＸ113から１点（右）が出土している。

ヤマトシジミ　ＳＢ305土間貝層から60点（左23右35不明２）、ＳＸ122から２点（左１右１）、ＳＸ308（左右不明）、ＳＢ201上面整地層（右）、ＳＫ117（右）から１点ずつ、計65点が出土している。

アサリ　瓦積井戸６から１点（右）が出土している。

ハマグリ　ＳＫ112から５点（左２右３）、ＳＸ308（左１右３）、ＳＢ305土間貝層（左１右３）から４点ずつ、ＳＸ122（左２右１）、瓦積井戸６（左２右１）から３点ずつ、ＳＫ104から２点（左）、ＳＸ120（左）、第３遺構面ベース層（左）から１点ずつ、計23点が出土している。

ｃ）魚類

トビエイ科　ＳＸ116下層から歯板が１点出土している。

トビエイ上科　ＳＸ114から尾棘が１点出土している。

エイ・サメ類　すべて椎骨であり、ＳＫ103から122点、ＳＸ114から７点、ＳＫ109から２点、ＳＸ316、第４遺構面ベース層、第４遺構面造成層から１点ずつ、計134点が出土している。いずれも椎体径10㎜以下の小型個体である。

ハモ属　ＳＢ202上面焼土から歯骨（右）１点、ＳＫ111から椎骨２点、歯骨（左）１点、ＳＸ112から椎骨５点、ＳＸ114から椎骨３点、前頭骨１点、ＳＸ116下層から歯骨（右）１点、計14点が出土している。大きさは、ＳＢ202上面焼土の１点、ＳＫ111の２点、ＳＸ114の１点は体長50㎝以下、それ以外は50㎝以上と推定される。

ウツボ属　中央部西端整地層から歯骨（右）が１点出土しており、体長100㎝以下である。

マイワシ　ＳＫ109から主上顎骨（左）、ＳＸ112から舌顎骨（右）が１点ずつ、計２点が出土している。ＳＫ109の１点は体長20㎝以下、ＳＸ112の１点は体長20㎝前後と推定される。

ニシン科　ＳＫ109から椎骨１点、ＳＸ112から椎骨６点、計７点が出土している。大きさは、ＳＸ112の４点は体長20㎝前後、それ以外は20㎝以下と推定される。

コチ科　ＳＢ202イロリから歯骨（左）１点、ＳＢ202焼土面直上から角骨（左）１点、整地層から歯骨（右）１点、ＳＫ103から椎骨４点と歯骨（左）１点、ＳＫ112から主上顎骨（右）１点、ＳＸ104から歯骨（右）１点、ＳＸ112から主上顎骨（左）１点、ＳＸ114から椎骨と主上顎骨（左）１点ずつ、ＳＸ116下層から歯骨（左）１点、計14点が出土している。大きさは、ＳＫ112の１点は体長50㎝以上の大型個体、ＳＫ103、ＳＸ112、ＳＸ116の１個体ずつが体長20～30㎝、ＳＢ202焼土面直上の１点は体長40～50㎝、その他の９点は体長30～50㎝と推定される。

オニオコゼ属　ＳＸ114から方骨（右）、第３遺構面基盤層から歯骨（右）が１点ずつ、計２点が出土している。大きさは、いずれも体長20～30㎝と推定される。

アマダイ属　ＳＸ114から主上顎骨（左）が１点出土しており、体長30～40㎝と推定される。

ブリ属　ＳＫ109から角骨（左）１点が出土しており、体長70～80㎝と推定される。

アジ科　ＳＸ112から椎骨が１点出土しており、体長20～30㎝と推定される。

ヒゲダイ属　中央部西端地区の江戸時代中期の整地層から前上顎骨（左）１点が出土しており体長20～30㎝と推定される。

クロダイ属　ＳＢ202イロリから歯骨（左）、ＳＫ103から前上顎骨（右）、ＳＸ106から前上顎骨（左）が１点ずつ、計３点が出土している。大きさは、ＳＢ202イロリの１点は体長30㎝程度、その他は体長20～30㎝と推定される。

マダイ　ＳＤ501から神経頭蓋、ＳＫ109から前上顎骨（左）、口蓋骨（右）、椎骨、ＳＫ120から主鰓蓋骨（右）、ＳＸ113から前頭骨、ＳＸ114から主上顎骨（右）、ＳＸ116下層から前鰓蓋骨（右）が１点ずつ、計８点が出土している。大きさは、ＳＸ113の１点は体長20㎝前後であるが、それ以外は30㎝以上であり、ＳＸ114の１点は60㎝を超える大型個体である。

タイ科　いずれも顎骨から遊離した歯であり、ＳＫ103から８点、ＳＸ103から３点、ＳＸ112、ＳＸ120から１点ずつ、計13点が出土している。

キス属　ＳＫ111から椎骨２点が出土しており、体長10～20㎝と推定される。

イシダイ属　ＳＸ116から前上顎骨（右）が１点出土しており、体長30～40㎝と推定される。

ベラ科　ＳＸ112から下咽頭骨、ＳＸ114から歯骨（右）が１点ずつ、計２点が出土している。いずれも体長20㎝以下の小型個体である。

タチウオ科　ＳＸ114から歯骨（右）１点が出土しており、大きさは50㎝以下と推定される。

サバ属　ＳＸ104から椎骨１点が出土しており、体長30～40㎝と推定される。

ヒラメ科 中央部西端地区の江戸時代中期の整地層から主上顎骨（左）１点が出土している。

カレイ科　ＳＫ103から椎骨２点、ＳＫ109から椎骨１点、ＳＸ114から椎骨４点、尾舌骨１点、ＳＸ119から椎骨１点、ＳＸ125から方骨（左）１点、計10点が出土している。大きさは、ＳＫ

103の２点、ＳＸ125の１点が体長20㎝以上の大型個体、その他は体長20㎝未満の個体である。

ウシノシタ科　ＳＸ114から椎骨５点、ＳＸ101から椎骨１点、ＳＫ111から椎骨１点、計７点が出土している。

カワハギ科　ＳＸ116下層から第１背鰭棘が１点出土しており、体長20～30㎝と推定される。

フグ科　第３遺構面ベース層から前上顎骨（右）１点、ＳＢ202イロリから椎骨と前鰓蓋骨（左）が１点ずつ、ＳＢ202炭層上面から前鰓蓋骨（右）１点、ＳＢ202上面焼土層から神経頭蓋、歯骨（右）、角骨（右）、方骨（右）、前鰓蓋骨（左）１点ずつ、ＳＫ103から前上顎骨／歯骨１点、ＳＫ109から前上顎骨／歯骨２点、前上顎骨（右）１点、ＳＫ110から前上顎骨（左）１点、ＳＫ120から綱翼状骨（右）１点、ＳＸ114から前上顎骨／歯骨３点、前上顎骨（左）２点、椎骨、歯骨（左）、舌顎骨（左）、主鰓蓋骨（右）１点ずつ、ＳＸ116から前上顎骨／歯骨２点、ＳＸ116下層から歯骨（左１右２）３点、前上顎骨（左１右１）２点、方骨（左）、椎骨１点ずつ、計33点が出土している。大きさは、ＳＸ116では体長30㎝前後の個体が大部分であるが、ＳＫ103、ＳＫ109では体長20㎝以下の小型個体が、ＳＫ109では体長40㎝以上の大型個体が出土している。

ｄ）哺乳類

ヒト　ＳＸ112から、遊離歯が１点出土している。

イヌ　調査区中央部中央で検出した街路から、脛骨（左２右１）３点、椎骨、上腕骨（左１右１）、寛骨（左１右１）、大腿骨（左１右１）が２点ずつ、肩甲骨（左）、計12点が出土している。脛骨、上腕骨、寛骨、大腿骨の左右１点は、同一個体のものと考えられる。

ネコ　ＳＢ202床面から肩甲骨（左）、ＳＫ110から上腕骨（左）１点ずつ、計２点が出土している。ＳＫ110の上腕骨は両端が癒合していない幼獣である。

ネズミ科　ＳＢ201イロリから大腿骨（左）、脛骨（左）が１点ずつ、ＳＫ109から脛骨（左）１点、遊離歯（上顎切歯、下顎M1）２点、椎骨、尺骨、距骨（右）が１点ずつ、計８点が出土している。ＳＢ201イロリから出土している大腿骨は、遠位端が癒合していない若獣である。

クジラ目　第４遺構面造成層から下顎骨と橈骨と思われるものが１点ずつ、計２点が出土している。

３．骨角製品

擬餌針と思われるものが、ＳＢ202から１点出土している（図56-540）。軸部の素材は、ニホンジカの枝角の先端部を使用し、両端を切断する。断面円形の棒状を呈し、最大長約6.4㎝、最大径1.2㎝を測る。針は鉄製であり、破損しているが、装着状態を保持する。鉄錆の析出によって膨張し、茎に亀裂が生じる。基部には紐通し孔が穿たれ、最小径約0.4㎝を測る。兵庫津遺跡第57次調査で類似品が出土している（丸山2014）。

釦が、ＳＸ114から１点出土している。骨製か鹿角製のいずれかの同定は困難である（図56-541）。破損して半円形を呈するが、元来は正円形であろう。最大径約1.6㎝を測る。

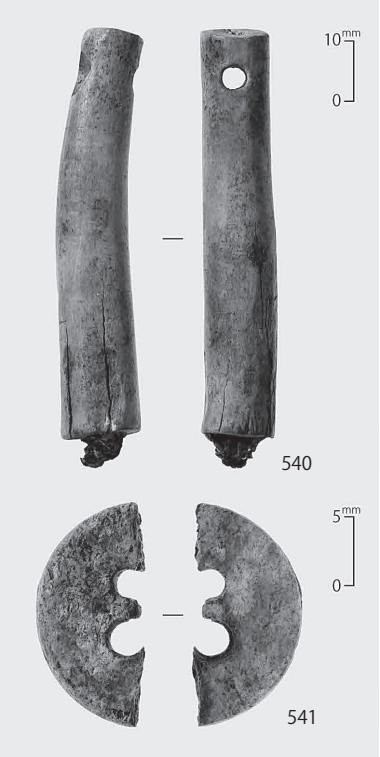


図56　出土骨角製品

２箇所に穿孔があり、孔径はそれぞれ約0.3㎝、0.2㎝を測る。

骨製と思われるヘラ状製品が、ＳＸ104から１点出土している。破損した小片であり、全体形は不明である。

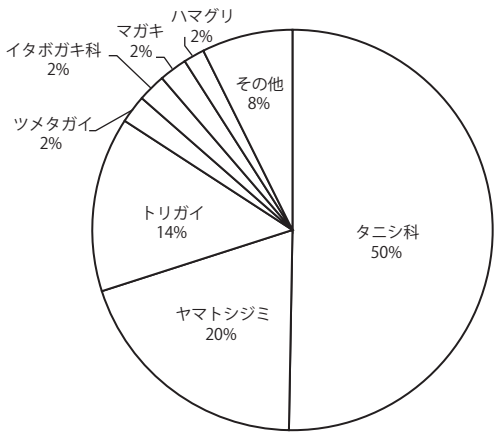


図57　ＳＢ305土間貝層の貝種組成
（MNI=177）

４．動物利用の特徴

当調査では、サンゴ類、貝類、魚類、哺乳類などが出土している。サンゴ類は少量であるが、キクメイシの仲間である。兵庫津遺跡では、他の調査地点でも少量ずつであるが、頻繁に出土する。漢方などに利用された可能性もあるが、表面の風化により切削痕などは明確ではない。哺乳類はイヌ、ネコ、ネズミ科といった食用とは考えられないもの以外に、鯨類の出土がある。鯨類はイルカよりも大きく、小型のクジラと推測される。瀬戸内海にも小型のクジラが進入することはあるが、兵庫津の近海での捕鯨によるものか定かではない。貝類や魚類の大部分は食用となるものであり、従来の調査で出土している種類ばかりである。魚類は埋桶ＳＫ103で、大量のエイ・サメ類の椎骨が出土している。同一個体のものが多く含まれると推測され、消費量が特別に多かったとは考えにくい。

これまでの調査成果では、兵庫津遺跡における水産物利用の最大の特徴は、町屋でトリガイを集中的に廃棄し、剥き身を製造していたと考えられることである。第14次調査では、京都や大坂などの近世都市に一般的な屋敷地とは性格が異なる廃棄物が含まれていることや、トリガイの剥き身製造により生じた廃棄物であることが指摘される（丸山2012、丸山・松井2010）。また、第62次調査では、町屋の一角でトリガイの貝溜まりが形成され、最大規模の貝溜まりでは最小個体数にして429個体、破片重量は約12kg と一般家庭における食料残滓とは考えにくく（丸山2017）、水揚げ地における商品生産と推察される。

当調査においても多数の貝類が出土しており、トリガイの出土量は破片総数では２番目に多く、江戸時代前期から中期の町屋建物ＳＢ305の土間貝層で集中的に出土している。最小個体数で25個体（約1.4kg）を数え、第14次調査、第62次調査に比べて出土量は少ない。トリガイが利用されたことは明らかであるが、一般家庭における廃棄量とみることもできる。しかしながら、後述するようにＳＢ305土間貝層の貝類は、一般的な食料残滓と即断することはできない。

ＳＢ305土間貝層では、タニシ科、トリガイのほかには、ヤマトシジミ35個体、マガキ、イタボガキを含むイタボガキ科９個体、ツメタガイ４個体、ハマグリ３個体など、17種類を同定している（図２）。種類は豊富であり、食用となる貝種で構成される。最も多く出土したのはタニシ科であり、89個体が出土している。兵庫津遺跡では、これまでにもタニシ科は出土しているが、当調査のように大量かつ集中的な出土例はない。タニシ科は食用となるが、兵庫津遺跡において食用貝類の主要な位置を占めることはない。出土したタニシ科の大きさは、殻長30～50㎜の個体が多いが、食用に適さない小型個体も混在しており、大きさの選別は徹底されていないことも特徴的である。また、一定量の動物遺存体が出土している他の町屋建物や廃棄土坑では、魚類が出土しているが、ＳＢ305土間貝層はフルイを用いて貝層土壌を水洗選別したにもかかわらず、貝類以外の動物種はみられない。以上にみるように、貝殻のみの集積である

こと、食用として重要種とは考えられないタニシ科の大量出土かつ小型個体が混在することは、単なる食料残滓の廃棄とは考えにくい。

大阪府堺市の堺環濠都市遺跡では、中世末から近世初頭の塼列建物が出土しており、防湿を目的として床下に貝殻を敷き詰めたとされ、SKT959地点の塼列建物のハマグリの破損率は高く、防湿効果を高めるため砕いたことが指摘される（池田2008）。今回の兵庫津遺跡の調査では、町屋建物の土間の表面に敷き詰められたものではなく、帯状に分布しており、破損も著しくないことから（Ｐ48参照）、防湿効果とは別の目的による土間構築時の意図的な貝殻利用が想定される。

５．まとめ

当調査では、サンゴ類、貝類、魚類、哺乳類などが出土しており、それらの多くは食料残滓と考えられる。そのようななかで、町屋建物ＳＢ305の土間で検出された貝層が特筆された。タニシ科を中心として、トリガイ、ヤマトシジミ、カキ類、ツメタガイなど兵庫津遺跡で一般的な食料残滓を含む貝種で構成される。兵庫津遺跡の既往の調査ではタニシ科が組成の主となる地点はなく、当地点の最大の特徴である。土間の構築に際して、薄い貝層を形成した目的は明らかではないが、兵庫津における食利用以外の貝類の用途を窺える意義深い資料である。また、骨角製品のなかには鹿角製の擬餌針と思われるものがあり、兵庫津遺跡では本資料が２例目となり、近世の漁業を考えるうえで貴重な資料であり、今後のさらなる漁具の吟味が期待される。

参考文献

池田研2008「SKT959地点出土の貝類」『堺環濠都市遺跡Ⅰ（SKT959地点）』大阪府文化財センターpp. 149-152

丸山真史2012「近世の兵庫津における水産物利用」『ビオストーリー』vol. 17生き物文化誌学会 pp. 86-99

丸山真史2014「兵庫津遺跡第57次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 pp. 97-108

丸山真史2017「兵庫津遺跡第62次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 pp. 243-258

丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡発掘調査報告書　第14・20・21次調査』第１分冊　神戸市教育委員会　pp. 353-386

表５　出土動物遺存体集計表

○は破片を示す

江戸前期？	大分類	小分類	部位	左	右	−
溝ＳＤ 501	魚類	マダイ	神経頭蓋	1		
第３遺構面ベース層	貝類	アワビ類？	殻			○
		アカニシ？	殻			1
		ツメタガイ	殻			2
		ウラシマガイ	殻			1
		巻貝	殻			1
		マガキ	殻		2	
		イタボガキ科	殻			1
		イタボガキ科？	殻			1
		トリガイ	殻	1		
		トリガイ？	殻			○
		フネガイ科？	殻			○
		ハマグリ	殻	1		
	魚類	オニオコゼ属	歯骨		1	
		フグ科	前上顎骨		1	
		不明	上擬鎖骨	1		
			不明			2
			鱗			○
第４遺構面ベース層	貝類	アカニシ	殻			2
	魚類	エイ・サメ類	椎骨			1
第４遺構面造成層	貝類	アカニシ	殻			1
		テングニシ	殻			1
		イタボガキ	殻	2	1	
		イタボガキ科	殻		1	
	魚類	エイ・サメ類	椎骨			1
	哺乳類	クジラ類	下顎骨？			1
			橈骨？			1

江戸前～中期	大分類	小分類	部位	左	右	−
土坑ＳＫ 301	貝類	アカニシ	殻			1
土坑ＳＫ 312	貝類	トリガイ	殻	1		
土坑ＳＸ 308	貝類	サザエ	蓋			1
		ツメタガイ	殻			7
		テングニシ	殻			1
		バイ	殻			2
		巻貝	殻			1
		マガキ	殻	3	4	
		イタボガキ科	殻		1	
		ハマグリ	殻	1	3	
		ヤマトシジミ	殻			1
土坑ＳＸ 316	貝類	アカニシ	殻			1
	魚類	エイ・サメ類	椎骨			1
建物ＳＢ 305 土間貝層	貝類	アワビ類	殻			1
		サザエ	殻			2
		ツメタガイ	殻			4
		タニシ科	殻			89
		ウミニナ科	殻			1
		キサゴ？	殻			1
		アカニシ	殻			2
		バイ	殻			2
		アカガイ	殻	1		
		イシガイ科	殻	2		1
		マガキ	殻	1	4	
		イタボガキ	殻	1	1	
		イタボガキ科	殻	3	4	
		タマキガイ	殻	1	1	
		トリガイ	殻	22	25	
		フネガイ科	殻			○
		ハマグリ	殻	1	3	
		ヤマトシジミ	殻	23	35	2
街路（中央部東半）	哺乳類	イヌ	上腕骨	1	1	
			大腿骨	1	1	
			寛骨	1	1	
			椎骨			2
			肩甲骨	1		
			脛骨	2	1	
		不明	肋骨？			1

江戸中期	大分類	小分類	部位	左	右	−
建物ＳＢ 201 イロリ構築粘土	哺乳類	ネズミ科	大腿骨	1		
			脛骨	1		
建物ＳＢ 201 床面	貝類	巻貝	殻			○
建物ＳＢ 201 上面焼土	貝類	バイ	殻			1
建物ＳＢ 202 イロリ（東）	貝類	アカニシ	殻			○
		ウミニナ科	殻			1
		ツメタガイ	殻			2
		マガキ	殻	1	2	
	魚類	クロダイ属	歯骨	1		
		コチ科	歯骨	1		
		フグ科	前鰓蓋骨	1		
			椎骨			1
建物ＳＢ 202 上面焼土	棘皮類	キクメイシ科？				1
	貝類	サザエ	蓋			1
		ウミニナ科	殻			10
		レイシガイ？	殻			1
		アカニシ	殻			1
		巻貝	殻			1
		マガキ	殻		7	
		イタボガキ	殻	1		
		イタボガキ科	殻	3	2	○
		トリガイ	殻	6	6	○
	魚類	ハモ属	歯骨		1	
		フグ科	神経頭蓋	1		
			歯骨		1	
			角骨		1	
			方骨		1	
			前鰓蓋骨	1		
		フグ科？	椎骨			1
		不明	前鰓蓋骨	1		
			不明			1
			不明			1
建物ＳＢ 202 炭層上面	魚類	フグ科	前鰓蓋骨	1		
建物ＳＢ 202 焼土面直上	魚類	コチ科	角骨	1		
		不明	鰭棘			1
建物ＳＢ 202 床面	貝類	巻貝	殻			1
	哺乳類	ネコ	肩甲骨	1		
建物ＳＢ 204 カマド	貝類	アカニシ	殻			1
建物ＳＢ 209 イロリ？	貝類	サザエ	殻			○
整地層	貝類	イタボガキ科	殻			1
	魚類	ウツボ属	歯骨		1	
		コチ科	歯骨		1	
		ヒゲダイ属	前上顎骨	1		
		ヒラメ科	主上顎骨	1		
		不明	前鰓蓋骨		1	

江戸後～幕末	大分類	小分類	部位	左	右	−
井戸？ＳＫ 110	魚類	不明	鱗			○
井戸？ＳＫ 110 掘形	魚類	フグ科	前上顎骨	1		
井戸？ＳＫ 110 枠内	貝類	トリガイ	殻			○
	哺乳類	ネコ	上腕骨	1		
土坑ＳＫ 101	貝類	アカニシ	殻			1
土坑ＳＫ 109	貝類	テングニシ	殻			2
		フネガイ科	殻			○
	魚類	エイ・サメ類	椎骨			2
		マイワシ	主上顎骨	1		
		ニシン科	椎骨			1
		ブリ属	角骨	1		
		マダイ	前上顎骨	1		
			口蓋骨		1	
			椎骨			1
		タイ科？	舌顎骨			1
		カレイ科	椎骨			1
		フグ科	前上顎骨		1	
			前上顎 / 歯骨			2

○は破片を示す

土坑ＳＫ 109	魚類	不明	椎骨			3
			鱗			1
	哺乳類	ネズミ科	脛骨	1		
		不明	不明			1
土坑ＳＫ 111	貝類	巻貝	殻			1
		トリガイ	殻			1
	魚類	ハモ属	椎骨			2
			歯骨	1		
		スズキ属？	椎骨			1
		キス属	椎骨			2
		ウシノシタ科	椎骨			1
		不明	椎骨			4
			主上顎骨		1	
			主鰓蓋骨			1
土坑ＳＫ 113 砂	貝類	ツメタガイ	殻			1
土坑ＳＫ 115	貝類	アワビ類	殻			1
		サザエ	殻			1
土坑ＳＫ 120	魚類	マダイ	主鰓蓋骨		1	
		フグ科	後翼状骨		1	
		不明	鰓蓋骨？			1
			不明			1
土坑ＳＸ 113	貝類	シオフキ	殻		1	
	魚類	マダイ	前頭骨			1
土坑ＳＸ 116	貝類	サザエ	蓋			1
		ツメタガイ	殻			6
	魚類	フグ科	前上顎 / 歯骨			2
		不明	鰓蓋骨			1
土坑ＳＸ 116 下層	貝類	サザエ	蓋			3
		ツメタガイ	殻			10
		フネガイ科	殻			○
	魚類	トビエイ科	歯板			1
		ハモ属	歯骨		1	
		コチ科	歯骨	1		
		マダイ	前鰓蓋骨		1	
		イシダイ属	前上顎骨		1	
		カワハギ科	第 1 背鰭棘			1
		フグ科	前上顎骨	1	1	
			方骨	1		
			椎骨			1
			歯骨	1	2	
		不明	間鰓蓋骨？			1
			鰭棘			2
土坑ＳＸ 119	魚類	カレイ科	椎骨			1
		不明	椎骨			1
土坑ＳＸ 120	貝類	アカニシ	殻			1
		イタボガキ科	殻		1	
		ハマグリ	殻	1		
	魚類	タイ科	遊離歯			1
		不明	椎骨			1
土坑ＳＸ 122	貝類	イタボガキ科	殻		2	
		ハマグリ	殻	2	1	
		ヤマトシジミ	殻	1	1	
埋桶ＳＫ 103	魚類	エイ・サメ類	椎骨			122
		コチ科	椎骨			4
			歯骨	1		
		クロダイ属	前上顎骨		1	
		タイ科	遊離歯			○
		タイ科？	椎骨			1
		カレイ科	椎骨			2
		フグ科	前上顎 / 歯骨			1
		不明	椎骨			133
埋桶ＳＫ 121	貝類	アカニシ	殻			1
埋桶ＳＸ 103	魚類	タイ科	遊離歯			○
		不明	鱗			○
埋桶ＳＸ 104	魚類	コチ科	歯骨		1	
		サバ属	椎骨			1
井戸ＳＥ 103 石組内	貝類	アカニシ	殻			4
		テングニシ？	殻			1
		アカガイ	殻	1		

石組ＳＫ 104	貝類	アワビ類	殻			1
		ハマグリ	殻	2		
石組ＳＫ 112	貝類	ツメタガイ	殻			1
		キサゴ類	殻			1
		ハマグリ	殻	2	3	
	魚類	コチ科	主上顎骨		1	
石組ＳＫ 117	サンゴ	キクメイシ科				1
	貝類	ヤマトシジミ			1	
石組ＳＸ 101	魚類	ウシノシタ科	椎骨			1
石組ＳＸ 106	貝類	クロアワビ				1
	魚類	クロダイ属	前上顎骨	1		
石組ＳＸ 112	魚類	ハモ属	椎骨			5
		マイワシ	舌顎骨		1	
		ニシン科	椎骨			6
		コチ科	主上顎骨	1		
		アジ科	椎骨			1
		タイ科	遊離歯			1
		ベラ科	下咽頭骨			1
		カレイ科？	椎骨			2
		不明	椎骨			22
			鋤骨			2
			鱗			1
	哺乳類	ネズミ科	尺骨		1	
			遊離歯	2		
		ヒト	遊離歯			1
石組ＳＸ 114	魚類	トビエイ上科	尾棘			1
		エイ・サメ類	椎骨			7
		ハモ属	前頭骨			1
			椎骨			3
		コチ科	主上顎骨	1		
			椎骨			1
		オニオコゼ属	方骨		1	
		マダイ	主上顎骨		1	
		タチウオ科	歯骨		1	
		ベラ科	歯骨		1	
		アマダイ属	主上顎骨	1		
		サバ属？	椎骨			1
		ウシノシタ科	椎骨			5
		カレイ科	尾舌骨			1
			椎骨			4
		フグ科	主鰓蓋骨		1	
			前上顎骨	2		
			前上顎 / 歯骨			3
			椎骨			1
			歯骨	1		
			舌顎骨	1		
		不明	擬鎖骨？			1
			方骨	1		
			椎骨			59
			歯骨		1	
			鱗			○
	哺乳類	ネズミ科	椎骨			1
			距骨		1	
石組ＳＸ 115	貝類	キサゴ類	殻			8
		タニシ科	殻			2
		マイマイ類	殻			1
		トリガイ	殻			1
	魚類	エイ・サメ類	椎骨			1
		不明	鱗			1
石組ＳＸ 117	サンゴ	キクメイシ科？				1
石組ＳＸ 125	魚類	カレイ科	方骨	1		
		不明	前鰓蓋骨	1		
			椎骨			2

明治以降	大分類	小分類	部位	左	右	-
瓦積井戸２内	サンゴ	キクメイシ科				1
瓦積井戸６	貝類	アサリ	殻		1	
		ハマグリ	殻	2	1	

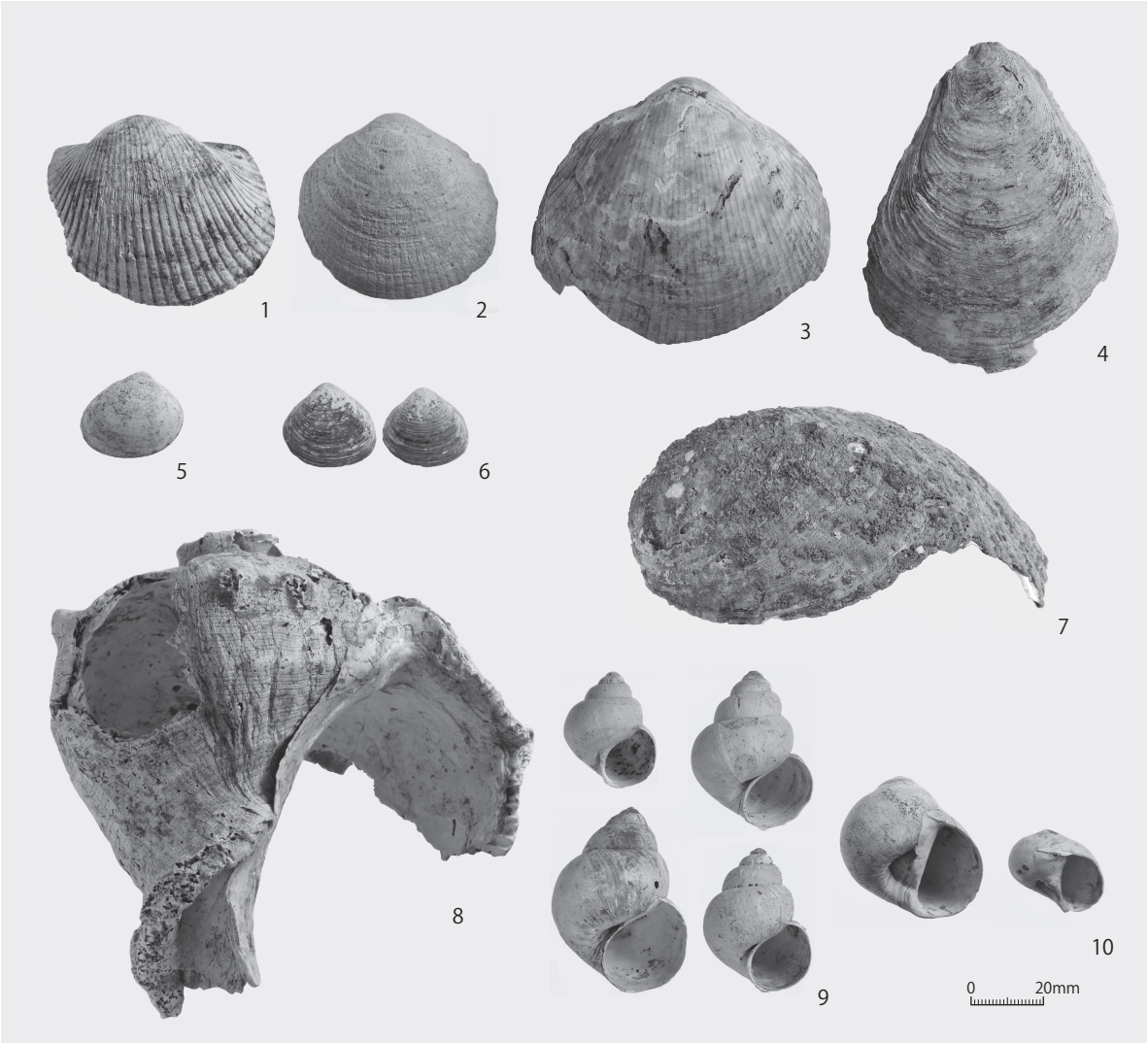


写真 84　1：アカガイ　2：タマキガイ　3：トリガイ　4：マガキ　5：ハマグリ
出土貝類　6：ヤマトシジミ　7：クロアワビ　8：アカニシ　9：タニシ科　10：ツメタガイ

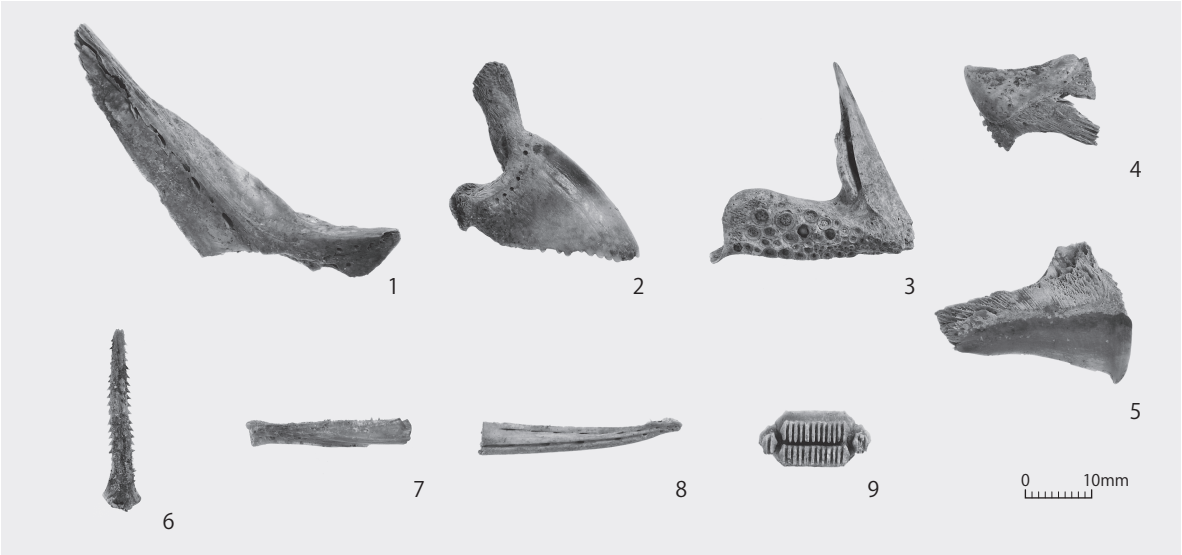


写真 85　1：マダイ前鰓蓋骨　2：イシダイ科前上顎骨　3：クロダイ前上顎骨　4：フグ科歯骨
出土魚類　5：フグ科前上顎骨　6：カワハギ科背鰭棘　7：コチ科歯骨　8：ハモ属歯骨
9：トビエイ科歯板

第４章　まとめ

第１節　遺構について

今回の調査地は、兵庫津の中でも新在家町の北東部に位置すると考えられる。新在家町は、慶長７年〔1602〕の『摂州矢田部郡兵庫屋地子帳』に記載があり、そこに記されている石盛が他所に比べて高く、生産力をもつ地区であることが窺える。また江戸時代、新在家町を中心とする一帯は、浜本陣と呼ばれる兵庫津独自の商形態を持つ商家が集まっていたことが知られている。

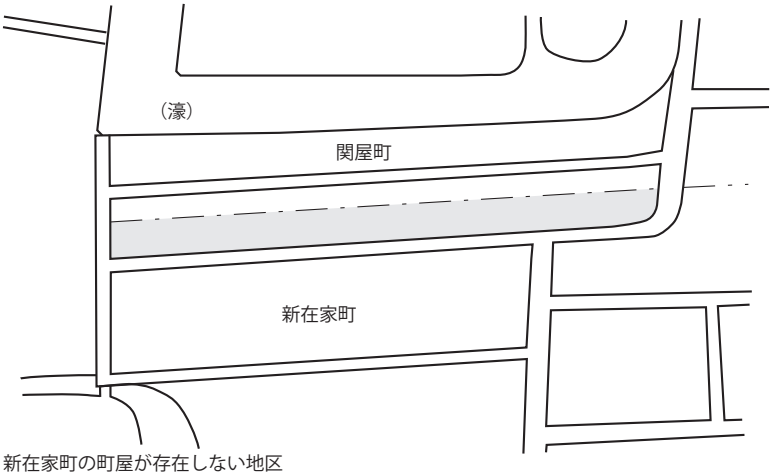
また周辺の街路や町並みの様子については、現存する元禄９年〔1696〕に作成された『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』(1)（以下、『元禄絵図』）に現在の地図との対比に耐えうる高い精度で描かれている。また町内の土地の所有関係については天保９年〔1836〕作成（以後加筆）の『新在家町水帳絵図』(2)（以下、『水帳絵図』）に克明に記されている。街路などを手掛かりとして調査区とこの水帳絵図の位置関係の照合については、巻頭図版６に示したとおりである。

なお、今回『元禄絵図』と『水帳絵図』の照合を行った際、『元禄絵図』において新在家町として描かれ（色塗りされ）ている部分のうち、新在家町西半部分で「御屋敷」の濠の南側を並行する街路の北側が存在しない可能性が高いことが判明した（図58）。兵庫津の海沿いの地区「浜方」の町は街路を挟む両側町となっている場合が多く絵図の作成過程で間違って記載されたのかもしれない。

一方、今回の発掘調査の成果としては、北に隣接する第62次調査に引き続き兵庫城周辺の町屋群に伴う遺構および遺物を確認することができた。特に第２遺構面では、調査区中央部付近において良好な焼土層および焼土面を検出することができたため、街路や町屋群およびこれに付随する生活関連遺構を調査することができた。

今回の第69次調査地区で検出された焼失町屋群の年代はや焼土層の時期については、ＳＢ201の出土遺物などから概ね18世紀前半が想定できる。この時期の焼土層は第62次調査では、確認できておらず周辺地域での遺構を検討する上で貴重な資料といえよう。

周辺地区の町屋域に関する調査成果の検討については、すでに平成28年度に刊行された『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』(3)の「第８章まとめ」において試みた。重複する部分もあるが、本調査の新たな成果も加えてここで再度確認のため整理して本書のまとめとしたい。



アミ部分：新在家町の町屋が存在しない地区

図58　『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』にみられる関屋町・新在家町の表示（原典を基にした略図）

なお、町屋群の遺構については、主に詳細な観察が可能であった第２遺構面の町屋群を中心としてみていきながら、他の遺構面については特徴的なものを随時取り上げることとする。

検出した町屋建物のうちＳＢ201およびＳＢ202は、街路の西側に面して、ＳＢ203とＳＢ204は街路の東側に面して建てられている。また北側には撹乱を挟むものの土間部分の広がりなどからＳＢ201とＳＢ202、ＳＢ203とＳＢ204は壁を接するように密接して町屋が存在していたと考えられる。一方ＳＢ205とＳＢ206は、１本西を走る南北方向の街路に面しており、２軒はやはり密接して建てられている。このように確認された町屋群は、街路に間口が取付き、隣同士の建物が密接する形態をとるもので、街路や屋地割りの方向などについても、絵図との照合の結果ほぼ齟齬をきたさないものであった。ただＳＢ203の裏（東）側で屋地が東に向かい大きくスロープ状に傾斜して下がっており、同一時期の屋敷地の高さについては、同一の町内に

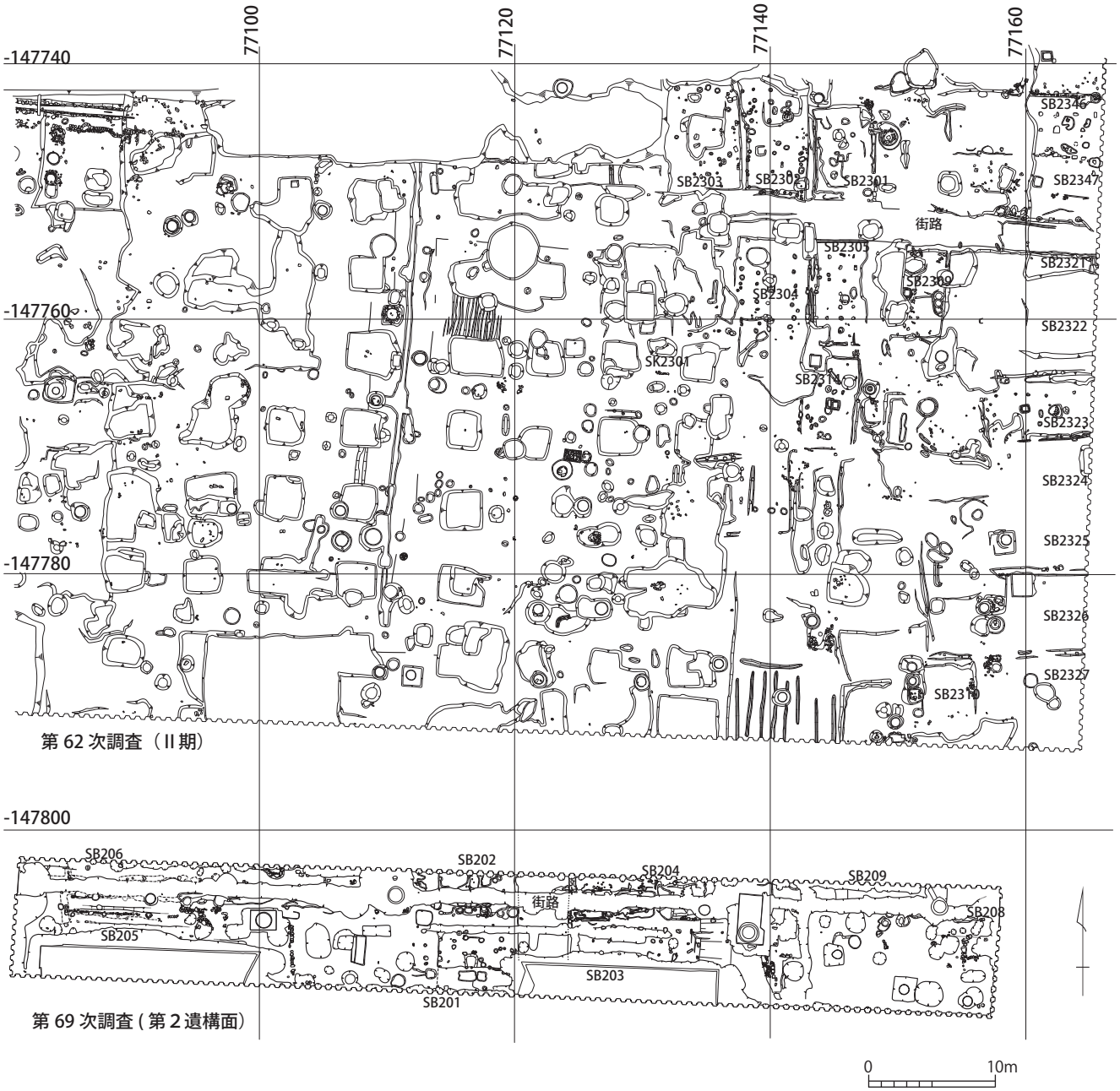


図59　第62次調査・第69次調査町屋平面図

おいてもかなり高低差があったと考えられる。残された絵図からは把握できない、立体的な配置についても知ることができた。

さらに今回、このＳＢ205・ＳＢ206とＳＢ201との屋敷地の境と考えられる部分において、石列が認められた。屋敷地の裏どうしの境界にこのような石列が明確に確認できたことは、今回初めてであり大変興味深い。

次に町屋建物の構造について、南北の両壁部分を撹乱により削平されているものの１棟全域を検出した町屋建物ＳＢ201においてみる。ＳＢ201の規模は推定で、間口が5.5mと狭く、奥行が8.0mと東西に細長いもので、南側に土間、北側に床貼の部屋部分をもついわゆる「片土間式」の建物である。焼失時の熱により赤変や焦げが確認できるため生活面が特定しやすく、検出状況としては、土間部分は砂や土、粘質土などを層厚1～数㎝で版築がみられ、床が敷かれていた部分には砂が敷き詰められ、束石と考えられる礎石が配されている。今回の調査で検出した他の町屋建物についても平面形式が確認できるものはすべてこの「片土間式」の建物である。

この「片土間式」の平面形式をとる町屋は、兵庫津遺跡内の町屋の構造としては、織豊期から江戸時代にかけての町屋を発掘した際に一般的にみられる町屋建物であり、隣接する第62次調査では確認された100棟を超える町屋において異なった形式を採るものはわずか数棟のみであった。さらに、兵庫津内の町屋建物の記録として江戸時代後期の古文書として残されている『座古屋久太夫居宅絵図』[(4)]にも同様の間取りがみられる。

また、第２遺構面の町屋建物には土間に付属する施設として、土間部分にカマドが設けられている。構造は、これまでの調査で確認されているものと同じで、平面形は馬蹄形で燃焼部を掘り込み、その上に粘土質の土で壁を構築したもので、２～５連が一組となり１基のカマドを構成している。今回検出したＳＢ202やＳＢ204をはじめ、これまでの調査での検出例からも壁際に設けられる場合が多い。しかし１軒の土間部分の何ヶ所かで検出される場合や、数次にわたる切り合いがみられることがあることから､頻繁に造り替えが行われていたようである。また、同じ兵庫津遺跡内でも七宮町における第14次調査地などでは、宝永の大火（1708年）の被災面の町屋においては、移動式のカマドがみつかっているものの、この形式のカマドは検出されておらず、この面より下層の遺構面になってはじめてカマドの存在が確認されている。今回の第２遺構面の時期を考えると、比較的早い段階で掘込み式のカマドを採用している資料となる。

またＳＢ201の部屋部分で今回検出されたイロリは、一辺90ｃｍほどの規模で、周囲を粘土によって四角く区切っている。このイロリも、兵庫津遺跡の町屋ではよく見られる遺構である。第62次調査では、粘土に竹などで芯を入れたものや、瓦片などで底部を囲うものなど入念な造りのイロリも確認されている。なおイロリについても、カマドと同様に造り替えがよくみられる。位置は､部屋部分の中央に設けられることや､ＳＢ201のように土間との境に配される場合が多い。

今回検出したＳＢ201では、北側の外壁と思われる土壁が建物内に倒れこんだ状態で検出された。土壁は芯材に太さ１㎝前後の竹状の材を木舞として組む様子が観察された。壁の構造を知る良好な資料といえよう。焼失後の炭化材の散在する町屋に焼け残った壁が倒れ込んだ状態で、そのまま整地するという造成過程がわかった。

なお検出した町屋建物のうち、ＳＢ305の土間については、版築土の中にタニシやシジミの貝層を確認している。土壌改良のために混入させた可能性も考えられるが、今後の類例の増加を待ちたい。

その他、町屋に伴う生活関連遺構を、各遺構面において確認している。特徴的な遺構として、埋桶遺構・石（木）組遺構などがある。これらの遺構が町屋建物の裏にあたる空間に設けられる遺構である。

埋桶遺構は、径60㎝～90㎝の木桶を掘形に埋め込んだ遺構で、第１・２遺構面において検出した。この遺構は、兵庫津内の他の調査でも町屋に伴い多くみつかっている。用途としては、内部に溜まった土壌に魚の骨や鱗、貝殻などが含まれるためゴミ穴と考えられる遺構である。

石組遺構についても、兵庫津内で多くみつかる遺構で、一般的に形状は、方形で４面の側壁に石積みをおこなう一方、底部については、素掘りのままである。今回の調査でも第１～５遺構面において検出している。石組遺構については、類似する遺構が、大坂城下町跡をはじめ各地の近世遺跡で確認されており、用途については、水溜めや貯蔵庫、便槽などがあげられている。

第14次調査の報告書[5]において、本遺跡に存在する石組遺構については、検出状況から貯蔵庫として使用された可能性が高いと指摘したが、それ以降、今回の調査も含めて他の用途を示す材料は確認できなかった。また木組遺構については、石組遺構のバリエーションのひとつとして捉えられる遺構である。最後に、第３遺構面については、第２遺構面のすぐ下で町屋に伴う遺構が検出されているものの、第４遺構面で確認した町屋遺構については、層厚40～70㎝におよぶ造成土の構築が認められ、第５遺構面についても同様の造成土がみられた。すぐ北に隣接する第62次調査地の関屋町地区の西部においては上面の削平によって不明であった町づくりの過程を示す成果と考えられる。

第２節　遺物について

前節で触れているように、今回の調査地は新在家町という地区に位置しており、北側に位置する第62次調査地の関屋町地区から続く町屋遺構を検出した。両調査で確認したそれぞれの町屋建物は、火災に遭う度に一定の範囲ごとに盛土を伴って順次建て替えられており、存続時間は一定ではない。また両調査の出土遺物の量については圧倒的な差がある。

本節では、以上の状況を踏まえた上で、両調査の町屋遺構出土の土器・陶磁器を取りあげ、近接した町屋の出土遺物について組成を中心に類似点や相違点を探り、考察を加えたい[6]。

第62次調査で確認された遺構については報告書において時期設定が行われており、Ⅰ期（江戸時代後期以降）、Ⅱ期（江戸時代前傾～中期）、Ⅲ期（織豊期後半～江戸時代初期）、Ⅳ期（織豊期前期）およびⅤ期（同）となる。今回の調査で検出した遺構面との対応については、第１遺構面がⅠ期、第２・３遺構面がⅡ期、第４・５遺構面がⅢ期の後半に概ね対応すると考えられるが、Ⅲ期の前半以前の時期に相当する遺構は確認していない。

土師器皿については、第62次調査町屋遺構出土のものでは、非ロクロ（手づくね）成形のものが多く、底部糸切りのものが少ない傾向がⅢ期を中心として指摘されているが、当調査ではロクロ成形で底部回転糸切りのものが多く、手づくね成形のものは少ない。また土師器炮烙は、第62次調査では、器高が高く外面に叩き痕が残る難波分類Ａ類が多く、器高の低い同Ｄ類は少ない傾向があるが、当調査出土の炮烙は、同Ｄ類がやや多く、同Ａ類は少ない。

陶器では、両調査とも、唐津窯製品が多い傾向がある。見込み蛇の目釉剥ぎ碗や刷毛唐津、二彩手や三島手がみられる。胎土目、砂目については、数量的な統計は行っていないが、両調査とも、ともにみられる。当調査では、古い様相を示すものは376の皮鯨手襞皿のように下層で出土しているが少なく、大半は砂目出現以降のものである。二彩手は皿や鉢、香炉がみられる。三島手には鉢や壷がある。絵唐津は、当調査では極少量である。

また銅緑釉を施し、見込み蛇の目釉剥ぎの嬉野窯皿も両調査ともに出土しているが、当調査の方が割合が高い傾向にあり、ＳＸ127のようにまとまって出土し、さらに通常みられる皿以外に口縁が輪花状を呈する皿が含まれるなどの特徴が見出せる。

織部や、黄瀬戸などは、第62次調査では一定量含まれるが、当調査では出土していない。

なお、陶器擂鉢には、唐津窯、須佐窯、備前窯、丹波窯、堺・明石窯系、瀬戸美濃窯といった各生産地のものが含まれ、大まかには両調査ともに共通する。このうち堺・明石系のものについては当調査ではＳＸ208から18世紀代のものが１点出土しているのみである。唐津窯のものは当調査では18世紀前半のものであるが、第62次調査では17世紀代のものである。須佐窯のものでは両調査とも17世紀中頃～後半のものや、17世紀末ないし18世紀前半頃のものがある。備前窯のものは、当調査では16世紀第３四半期のものから18世紀前半のものがある。第62次調査では17世紀代までのものに限られる。丹波窯のものは、両調査ともに17世紀第１四半期以降のものがある。第62次調査ではヘラ描きの擂目があるが、当調査ではみられない。瀬戸美濃窯のものは、両調査ともに少ないが、当調査では全体の器形がわかる309がある。

磁器については、国産のものとしては波佐見窯染付、同白磁、同青磁、同青磁染付、初期伊万里、瀬戸美濃窯染付がある。瀬戸美濃窯のものは極少量である。また、初期伊万里の製品は、第62次調査では一定量出土しているが、当調査では少ない。

輸入陶磁器では、両調査とも、中国製磁器である景徳鎮窯青花や漳州窯青花、朝鮮王朝陶磁や東南アジア産陶器などが出土している。

当調査では、景徳鎮窯や漳州窯の製品はともに約40点出土している。大半が青花で、景徳鎮窯のものには白磁が、漳州窯のものには白磁や五彩が、それぞれ数点含まれる。ほかに明確な産地決定には至っていないが中国製のものと考えられる青花や白磁があわせて約10点出土している。

景徳鎮窯のものには第62次調査では、器形の明らかなものが一定量出土しているが、当調査ではいずれも破片資料である。一方漳州窯のものでは、完形品ではないが275のように優品も含まれている。当調査ではこれらの景徳鎮窯や漳州窯の製品はいずれも16世紀末～17世紀初頭を中心とする時期のもので、各遺構面から出土している。江戸時代後半期までの時期において同様な年代を示す（古い時期の）当該製品が出土していることの意味を求めるならば、町屋建物の建て替えなどの際の整地に伴って下層に含まれる遺物が撹拌されて上位の土層に混入したことや、あるいは伝世品として扱われたものが新しい時期になって破片となったものかについては断定材料がなく、今後の課題である。

なお、兵庫津遺跡においては、景徳鎮窯や漳州窯の製品は、第53次調査では16世紀末～17世紀初頭の第６遺構面のＳＫ602において唐津窯皿（胎土目・砂目）、絵柄津皿と共伴している。また、第14次調査でも16世紀後半～末頃の第５～６遺構面で多く確認されている。

朝鮮王朝陶磁については、第62次調査では器形がわかるほど遺存状態がよいものが認められるが、当調査では小片が約10点出土しているのみである。東南アジア産陶器については、第62次調査では一定量確認されているが、当調査では、ＳＫ108からベトナム産長胴壷の小片が１点出土しているのみである。

中国製の青磁では、ＳＢ305裏ベース層から９～10Ｃの越州窯碗が１点出土している。また龍泉窯の製品が可能性のあるものを含めて７点出土しており、両調査とも古手のものも若干出土しているが主体は15世紀代のものである。

以上、種別ごとに両調査出土の土器・陶磁器についてみてきたが、両調査における出土遺物の様相の違いについては、第62次調査出土遺物の方が時期的に古いものを多く含むことにその要因があるように考えられる。新在家町という地区がその名の示すように兵庫津の中で比較的新しい時期に開発された町であることから、関屋町地区に比べて古い時期の遺構が乏しいことに由来するのかもしれない。また全般的な内容としては、第62次調査出土の陶磁器には、茶器関係のものが多く含まれるが、今回の調査では少ないということがあげられよう。

第３節　結びにかえて

今回の調査地は、兵庫津遺跡の中でも南側の地区に位置しており、これまであまり調査の行われてこなかった地区にあたっている。さらに、新在家町という兵庫津の町の中でも比較的新しい時期に開発が行われた地区において発掘調査を実施した。

調査の結果、すでに述べてきたように、火災による焼失を受けて順次建て替えられた町屋建物群や、次々に掘り返されたごみ穴などの土坑、石組遺構、井戸などの遺構を検出し、面によっては大規模な造成が行われたことも確認した。

一方、今回の調査では中世に遡る時期の遺構については確認できず、また遺物についても確実に中世まで遡ると考えられるのは軒平瓦や中国製陶磁器の一部のみであった。このことについては、第62次調査においても中世の遺構が確認されたのが西側に偏っていたこと、さらに今回の調査地の西側に位置する地区で実施した第59次調査においても中世の遺構・遺物が確認されていることから、当調査地よりも西側の地区において中世の遺構が広がるものと考えられる。

また遺物の中には、第３章第８節で触れられているように遺構埋土や造成土中から動物遺存体が出土している。魚類や貝類の積極的な利用が窺われ、当時の生活の一端を表している。ＳＢ305では土間に貝殻が埋め込まれていた。タニシなどの食用の多種の貝を使用しているが、当遺跡では他に例をみないほど多量に使用している。さらに第４遺構面造成層中からはクジラ類の骨が出土している。捕鯨によるものかは即断できないが稀有な例であり、今後も検討を加えていきたい。

以上、これまで不明なことが多かった兵庫津遺跡の南部にあたる地区において、江戸時代における土地開発および土地利用の状況が明らかとなった意義は大きいといえる。

なお今回、発掘調査中および調査終了後の整理作業中に、多くの専門家の方々からご指導、ご助言をいただくことができた。それらのすべてを報告書に反映させることはできなかったものの、より広い見地から遺構や遺物などの発掘調査成果について検討することができた。

最後に、文末ではありますが、本調査および報告書の刊行に至るまでの業務に携わった関係者および御協力をいただいた方々、機関に対し心からの感謝とお礼を述べ、本書の結びに変えたいと思います。

註

（１）神戸市立博物館寄託品
（２）神戸市立博物館寄託品
（３）斎木巌・中谷正・内藤俊哉編『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2017
（４）神戸市立博物館寄託品　（神戸市立博物館（編）『よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－』2004）
（５）内藤俊哉「第２章第12節まとめ」『兵庫津遺跡発掘調査報告書　第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010
（６）本書における土器・陶磁器等の考察に関しては巻末に掲げた各文献を参考としたが、特に形態分類を引用したものについては以下の文献に拠っている。
土師器炮烙：難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』㈶大阪市文化財協会1992
焼塩壷：小川望『焼塩壷と近世の考古学』同成社2008
丹波窯：長谷川眞「近世丹波焼の成立に関する覚書」『兵庫陶芸美術館研究紀要』兵庫陶芸美術館2009
須佐窯：佐伯昌俊「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古』第30号山口考古学会2010

参考文献

〔兵庫津遺跡全般〕

阿部功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2008

岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004

黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉『兵庫津遺跡発掘調査報告書　第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010

神戸市立博物館（編）『よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－』神戸市立博物館2004

斎木巌・中谷正・内藤俊哉編『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2017

藤本史子・中井淳史編『兵庫津の総合的研究』大手前大学史学研究所2008

松井良祐編『江戸時代の兵庫津』兵庫県立考古博物館2016

安田滋・内藤俊哉・中谷正『“大輪田”“兵庫”そして“神戸”』神戸市教育委員会2017

〔町屋〕

髙久智弘「近世期兵庫津北浜における浜先地開発と屋敷割の変化について」『神戸市立博物館研究紀要』第18号神戸市立博物館2002

髙久智弘「近世兵庫津絵図について」『中近世における都市空間の景観復元に関する学際的アプローチ』平成15～18年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（研究代表者　藤田裕嗣）2007

高橋康夫『京町家・千年のあゆみ』学芸出版社2001

中谷保二『濱本陣の研究』1956

野口徹『中世京都の町家』東京大学出版会1988

〔穴蔵〕

大成可乃「町人と穴蔵」『葦火』36号（財）大阪市文化財協会1992

豊田裕章「関西における石積み土壙の諸問題」『関西近世考古学研究』Ⅱ関西近世考古学研究会1992

堀内明博「穴蔵に関する遺構群をめぐって」『関西近世考古学研究』Ⅲ関西近世考古学研究会1992

豆谷浩之「近世大阪における穴蔵」『大阪歴史博物館研究紀要』第８号大阪歴史博物館2010

〔土器〕

岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003

難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』㈶大阪市文化財協会1992

〔陶磁器〕

赤沼多佳ほか『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』茶道資料館1990

赤松和佳「畿内における貿易陶磁の様相」『中近世陶磁器の考古学』第三巻雄山閣2016

赤松和佳「伊丹郷町遺跡出土の貿易陶磁器」『関西近世考古学研究』24関西近世考古学研究会2016

大橋康二「いわゆる京焼風陶器の年代と出土分布について」『青山考古』第８号青山考古学会1990

大橋康二『古伊万里の文様』理工学社1994

大橋康二『世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社2004

大橋康二「中国染付磁器の始まりから発展と、有田磁器との関わり」『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016

大橋康二監修『土の美　古唐津』佐賀県立九州陶磁文化館2008

大橋康二・吉永陽三・百田美和編『古伊万里の見方　シリーズ１』佐賀県立九州陶磁文化館2004

大橋康二・鈴田由紀夫・百田美和編『古伊万里の見方　シリーズ２』佐賀県立九州陶磁文化館2005

大橋康二・吉永陽三・宇治章・藤本志穂子・山本文子編『古伊万里の見方　シリーズ３』佐賀県立九州陶磁文化館2006

大橋康二・鈴田由紀夫・宇治章・中村康子・山本文子編『古伊万里の見方　シリーズ４』佐賀県立九州陶磁文化館2007

宇治章・藤原友子・大橋康二編『古伊万里の見方　シリーズ５』佐賀県立九州陶磁文化館2008

小川望『焼塩壺と近世の考古学』同成社2008

九州近世陶磁学会事務局編『九州陶磁の編年』2000

佐伯昌俊「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古』第30号山口考古学会2010

鈴木裕子「江戸出土の貿易陶磁」『関西近世考古学研究』24関西近世考古学研究会2016

角谷江津子「肥前京焼風陶器と京焼」『関西近世考古学研究』Ⅲ関西近世考古学研究会1992

弦本美菜子「日本における漳州窯系陶磁器の流通・消費」『中近世陶磁器の考古学』第三巻雄山閣2016

冨永樹之「輸入中国青花の高級食器としての受容の過程」『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016

中野雄二編『くらわんか藤田コレクション』長崎県波佐見町教育委員会2013
西田宏子・大橋康二監修『別冊太陽　古伊万里』平凡社1988
長谷川眞「近世丹波焼の成立に関する覚書」『兵庫陶芸美術館研究紀要』兵庫陶芸美術館2010
長谷部楽爾・今井敦『日本出土の中国陶磁』平凡社1995
藤澤良祐・岡本直久「江戸時代の瀬戸窯業」『江戸時代の瀬戸窯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター2002
藤沢良祐「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの』㈶瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2006
松本百合子「大阪市内出土の近世貿易陶磁器」『関西近世考古学研究』24関西近世考古学研究会2016
宮本康治「大阪出土の東南アジア陶磁器をめぐって」『中近世陶磁器の考古学』第三巻雄山閣2016
森村健一「15～17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集　国立歴史民俗博物館2002
森村健一「福建省漳州窯の研究」『陶磁器の考古学』第七巻雄山閣2017
山本文子「肥前芙蓉手皿の展開」『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016
山本文子編『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016
〔瓦〕
市川創「徳川期大坂城の瓦」『大阪文化財研究所研究紀要』第16号（公財）大阪市博物館協会　大阪文化財研究所2015
市川創「大阪における近世瓦の生産と流通」『幕藩体制下の瓦』第66回埋蔵文化財研究集会事務局2017
木村友紀「摂津出土の中世瓦編年」『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第13号帝塚山大学大学院2011
黒田慶一「瓦塼類」『瓦屋町遺跡発掘調査報告』㈶大阪市文化財協会2009
小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我　法隆寺昭和資材帳調査概報⑩』法隆寺昭和資材帳編纂所1989
櫻田小百合「徳川期大坂城瓦の編年試案」『大阪文化財研究所研究紀要』第18号（公財）大阪市博物館協会　大阪文化財研究所2017
杉本宏「桟瓦考」『考古学研究』第46巻第４号考古学研究会2000
杉本宏「桟瓦考拾遺」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会2002
杉本宏「桟瓦の成立と格」『幕藩体制下の瓦』第66回埋蔵文化財研究集会事務局2017
大安寺『重要文化財大安寺本堂修理工事報告書』1999
坪之内　徹ほか『谷川瓦調査報告Ⅰ』岬町教育委員会・谷川瓦調査委員会1992
兵庫県明石郡役所「明石郡冶内容一斑」1915『明石市史資料（明治後期篇）第八集（上）』明石市教育委員会1990所収
平井俊行「西村家の『由緒覺書』の考察と全文紹介」『京都府埋蔵文化財論集』第３集㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター1996
毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝　第15巻　瓦－昭和資材帳－』㈱小学館1992
山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所2000
山崎信二『近世瓦の研究』奈良文化財研究所2008
吉田理編『重要文化財　萬福寺松隠堂庫裏及び裏門・東方丈修理工事報告書』京都府教育庁2013
〔煉瓦〕
北山峰生「煉瓦についての概説」『ヒストリア』第231号大阪歴史学会2012
黒田恭正編『御影郷古酒蔵群第４次発掘調査報告書』神戸市教育員会2007
竹村忠洋「阪神地域で使用された煉瓦」『ヒストリア』第231号大阪歴史学会2012
千種浩編『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会2011
丸山潔編『神戸臨港線南本町架道橋範囲確認調査報告書』神戸市教育委員会2008

表６　出土遺物観察表

※時期は世紀を略してＣと表記し、時期の明確なものについては１世紀内を４分割して表示している（例：17Ｃ2/4＝17世紀第２四半期）。

（　　）内の数値は推定値、〔　　〕内の数値は残存値を示す。

掲載図番号	遺物番号	実測番号	Ｒ番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
60	1	1	952	1	東部	ＳＥ102石組み内	土師器皿（灯明皿）	6.35	1.1	3.05	回転糸切り	
	2	2	994	1	東部	ＳＥ102掘形	土師器皿	(7.65)	1.85	5.95	回転糸切り	
	3	1	952	1	東部	ＳＥ102石組み内	京焼風碗	12.7	5.6	3.8		18C 前半
	4	2	995	1	東部	ＳＥ102掘形およびその周囲	肥前系陶器碗	(9.3)	7.0	4.5		18C
	5	3	995	1	東部	ＳＥ102掘形およびその周囲	嬉野窯銅緑釉碗	(10.6)	6.7	(4.4)		18Ｃ前半
	6	4	952・975	1	東部	ＳＥ102石組み内・整地層（下）	瀬戸美濃窯緑釉菊皿	12.5	2.8	7.3	内面：印刻	18C 前半
	7	5	1015	1	東部	ＳＥ102掘形	丹波窯火入れ	(12.4)	6.7	(10.0)	口縁：キセル叩き痕	18C
	8	3	1087	1	東部	ＳＥ103掘形	土師器皿（灯明皿）	(7.7)	1.2	(6.8)	回転糸切り	
	9	7	1127	1	東部	ＳE103・瓦積井戸２断割中	波佐見窯白磁小坏	6.4	4.3	2.7		18C 前半
	10	6	1127	1	東部	ＳE103・瓦積井戸２断割中	波佐見窯染付碗	(10.2)	6.2	(4.0)	草花文	18C 前半
	11	4	502	1	東部	ＳＸ101	土師器皿	7.4	1.3	6.4	回転糸切り	
	12	20	261・307・360・394	1	東部	ＳＸ101	土師器炮烙	28.8	6.4	－	難波Ｄ類	18C
	13	12	067	1	東部	ＳＫ103	江永窯陶胎染付筒茶碗	(8.2)	6.8	4.4		18C 前半
	14	11	063・067 233	1	東部	ＳＫ103	波佐見窯染付猪口	7.7	5.9	4.8	花文、そば猪口	18C 前半
	15	13	067・258	1	東部	ＳＫ103・整地層	波佐見窯染付花生	(1.3)	12.4	4.5	宝づくし文	18C 前半
	16	18	292・320・1324・1379	1	東部	ＳＫ121・同　土壌選別・ＳＸ121　土壌選別	波佐見窯青磁染付碗	11.1	6.5	4.4		18Ｃ半ば～後半
	17	17	292・303・320・1378	1	東部	ＳＫ121・同　土壌選別	土師器蛸壺	(12.9)	25.9	12.0		
	18	22	426	1	中央部	ＳＸ131断面	土師器皿	(7.9)	1.4	6.1	回転糸切り	
	19	35	041・415・426	1	中央部	ＳＸ131・同　断面・撹乱坑６	土師器炮烙	22.3	6.3	－	難波Ｂ類？	
	20	21	117	1	中央部	ＳＸ103	波佐見窯染付八角鉢	15.4	7.6	7.4		19C
	21	22	229	1	中央部	ＳＸ105掘形	丹波窯火入れ	(13.0)	6.4	(9.9)		18C
	22	19	347	1	中央部	ＳＰ101	土師器蛸壺	－	〔14.5〕	9.9	胞衣壺	
61	23	23	139	1	中央部	ＳＸ113	陶器小碗	8.9	4.7	3.0		18Ｃ前半
	24	24	139	1	中央部	ＳＸ113	陶器小碗	8.9	4.8	3.2		18Ｃ前半
	25	25	139	1	中央部	ＳＸ113	波佐見窯染付碗	(9.3)	5.7	(3.8)	花文、焼継ぎ	18Ｃ後半
	26	26	139	1	中央部	ＳＸ113	瀬戸美濃窯染付碗	(8.0)	4.5	(3.0)		19C
	27	27	139	1	中央部	ＳＸ113	産地不明磁器菊皿	8.8	2.0	4.8		18C
	28	28	139	1	中央部	ＳＸ113	産地不明陶器容器	8.0	3.0	－		
	29	29	139	1	中央部	ＳＸ113	産地不明陶器容器	8.0	2.0	6.8		
	30	30	139	1	中央部	ＳＸ113	産地不明磁器水滴	－	4.1	4.0	宝づくし文	
	31	31	139	1	中央部	ＳＸ113	産地不明磁器水滴	6.6×10.8	3.4	－		
	32	32	139	1	中央部	ＳＸ113	備前窯水滴？	長さ8.9	高さ〔5.7〕	幅〔6.6〕		18C
	33	33	139	1	中央部	ＳＸ113	土製品・文箱（飯事道具）	長さ〔3.5〕	幅〔3.8〕	厚さ〔0.7〕		
	34	34	139	1	中央部	ＳＸ113	土製品・小形硯（飯事道具）	長さ〔5.8〕	幅〔3.4〕	厚さ〔0.9〕	使用痕	
	35	16	239・273	1	西部	ＳＫ115	土師器火舎	27.8×28.0	10.0	－		
	36	14	163・573	1	西部	ＳＫ110	土師器炮烙	(29.2)	7.0	－	難波Ｄ類、把手付き	
	37	15	1052	1	西部	ＳＫ110枠内	景徳鎮窯青花碗	－	〔2.9〕	5.5	水禽文	16C 末
	38	37	070	1	東部	第１遺構面～第２遺構面整地層	産地不明磁器水滴？	－	〔4.1〕	－		
62	39	9	400	1	中央部	撹乱（近代井戸）	京焼風碗	(10.2)	5.6	(4.0)		18C 前半
	40	10	400	1	中央部	撹乱（近代井戸）	唐津窯香炉	(10.2)	6.9	5.0	刷毛目文、置香炉	18C 前半
	41	8	400	1	中央部	撹乱（近代井戸）	唐津窯鉢	(31.6)	9.5	13.2	刷毛目文	18C 前半
	42	91	1165	2	東部	ＳＢ209イロリ？断割中	唐津窯淡緑色釉坏	8.1	4.3	3.5		17Ｃ1/4
	43	93	559	2	東部	ＳＸ203	波佐見窯染付碗	(10.2)	5.9	3.9	草花文	18Ｃ前半
	44	94	899	2	東部	ＳＸ203石除去中	波佐見窯染付碗	(9.3)	5.6	3.6	草花文	18Ｃ前半
	45	95	899	2	東部	ＳＸ203石除去中	瀬戸美濃窯緑釉掛け流し菊皿	(12.8)	2.6	(8.0)		18Ｃ前半
	46	54	544	2	東部	ＳＸ204	土師器皿	(7.0)	1.7	5.7	回転糸切り	
	47	55	900	2	東部	ＳＸ204石除去中	土師器皿（灯明皿）	(10.0)	1.7	(8.3)		
	48	23	199	2	中央部	ＳＢ201上面整地層	土師器皿（灯明皿）	(8.7)	1.7	(7.0)	回転糸切り	
	49	24	200・811	2	中央部	ＳＢ201上面整地層・同裏	土師器皿	(9.7)	1.65	(8.4)	回転糸切り	
	50	25	250	2	中央部	ＳＢ201上面整地層	土師器皿（灯明皿）	10.0	2.05	7.9	回転糸切り(摩耗 不鮮明)	
	51	56	216・237	2	中央部	ＳＢ201上面整地層	京焼風上絵付五彩碗	11.2	6.5	4.4		18C
	52	57	216	2	中央部	ＳＢ201上面整地層	京焼風碗	(11.1)	6.3	4.2	楼閣山水文、口紅	
	53	58	237	2	中央部	ＳＢ201上面整地層	産地不明陶器皿	(14.5)	2.9	8.6	景徳鎮模倣	
	54	59	200	2	中央部	ＳＢ201上面整地層	唐津窯淡緑釉皿	－	〔2.7〕	4.8	砂目	17Ｃ後半
	55	60	245	2	中央部	ＳＢ201整地層	嬉野窯灰釉皿	12.7	3.7	4.8		18Ｃ前半
	56	69	526	2	中央部	ＳＢ201裏上面整地層	嬉野窯銅緑釉皿	(12.7)	3.4	4.6		18Ｃ前半
	57	68	526・552	2	中央部	ＳＢ201裏上面整地層・同　整地層	波佐見窯染付皿	(14.3)	3.6	4.8	花文	18Ｃ前半
	58	70	526	2	中央部	ＳＢ201裏上面整地層	波佐見窯染付仏飯具	(8.0)	6.4	3.9	界線文	18Ｃ前半
	59	63	327・341・563・845	2	中央部	SB201上面整地層・SB202上面焼土・SB204カマド④・第3遺構面ベース層	波佐見窯染付碗	(10.5)	6.1	(4.0)	寿字文	17Ｃ後半

掲載図番号	遺物番号	実測番号	R番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
62	60	61	200・845	2	中央部	ＳＢ201上面整地層・第３遺構面ベース層	産地不明陶器甕	－	〔12.9〕	17.4		
63	61	64	312・467	2	中央部	ＳＢ201上面焼土・同　焼土面上面検出中	波佐見窯染付小坏	6.4	4.0	2.5	界線文	18Ｃ前半
	62	62	143・159・190・312・327・369・536・563・1024・1185・1269	2	中央部	ＳＢ202上面整地層・精査中・ＳＢ201上面焼土・ＳＢ202集石部・ＳＸ201西部・ＳＢ204カマド④・整地層・ＳＢ202他ベース層・第４遺構面精査中・第４遺構面ベース層	波佐見窯染付盤	31.2	7.5	15.6		17Ｃ後半
	63	28	688	2	中央部	ＳＢ201焼土面	土師器皿（灯明皿？）	7.6	1.4	6.3	回転糸切り	
	64	29	703	2	中央部	ＳＢ201焼土面	土師器皿	(7.8)	1.65	(6.2)	回転糸切り	
	65	27	645	2	中央部	ＳＢ201焼土面	土師器皿	7.9	1.8	6.55	回転糸切り	
	66	65	687	2	中央部	ＳＢ201焼土面直上	肥前窯白釉埦	11.0	6.9	4.8		18Ｃ前半
	67	71	527	2	中央部	ＳＢ201裏焼土面直上	波佐見窯染付碗	(10.4)	5.9	4.4	松葉文	18Ｃ前半
	68	72	527	2	中央部	ＳＢ201裏焼土面直上	波佐見窯染付小坏	(6.4)	4.0	3.0	笹文	18Ｃ前半
	69	30	759	2	中央部	ＳＢ201床面	土師器皿	6.45	1.3	6.15	回転糸切り	
	70	67	268・552・759	2	中央部	ＳＢ201炭層上面検出中・同裏　整地層・同　床面	波佐見窯染付芙蓉手皿	(21.6)	3.7	(10.6)		17Ｃ後半
	71	75	552・759・811	2	中央部	ＳＢ201床面・同裏・同裏　整地層	須佐窯擂鉢	(31.5)	〔8.2〕	－	擂目８本、佐伯Ｉ群Ｂ類	
	72	56	496	2	中央部	ＳＰ201（＝ＳＢ201イロリ）	土師器皿（灯明皿）	7.3	1.7	5.7	回転糸切り	
64	73	5	463	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿	6.6	1.6	5.9	回転糸切り	
	74	14	697	2	中央部	ＳＸ127最下層	土師器皿	6.9	1.5	5.0	回転糸切り	
	75	9	433	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿（灯明皿）	7.0	1.5	5.6	回転糸切り	
	76	17	700	2	中央部	ＳＸ127最下層	土師器皿（灯明皿）	7.1	1.45	5.95	回転糸切り	
	77	18	856	2	中央部	ＳＸ127最下層	土師器皿（灯明皿）	7.1	1.5	5.65	回転糸切り	
	78	12	493	2	中央部	ＳＸ127下層	土師器皿（灯明皿）	7.2	1.35	5.85	回転糸切り	
	79	6	428	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿	7.4	1.6	6.2	回転糸切り	
	80	10	463	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿（灯明皿）	7.4	1.5	6.8	回転糸切り	
	81	8	432	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿（灯明皿）	7.5	1.45	6.8	回転糸切り	
	82	7	428	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿	7.6	1.35	7.1	回転糸切り	
	83	19	694	2	中央部	ＳＸ127最下層	土師器皿（灯明皿）	8.3	1.65	5.4	回転糸切り	
	84	21	982	2	中央部	ＳＸ127掘形	土師器皿	8.05	1.75	5.75	回転糸切り	
	85	16	695	2	中央部	ＳＸ127最下層	土師器皿（灯明皿）	7.7	1.7	5.55	回転糸切り後ヘラおこし	
	86	13	492	2	中央部	ＳＸ127下層	土師器皿（灯明皿）	9.5	2.1	7.55	回転糸切り後ヘラおこし	
	87	20	513	2	中央部	ＳＸ127最下層	土師器皿	10.05	2.1	6.1	回転糸切り後ヘラおこし	
	88	11	463	2	中央部	ＳＸ127上層	土師器皿（灯明皿）	(10.2)	1.65	(6.6)		
	89	38	981・982	2	中央部	ＳＸ127	土師器炮烙	(25.6)	7.6	－	難波Ｃ類？	
	90	53	487・581・700	2	中央部	ＳＸ127下層・ＳＢ208焼土	瓦質土器火舎	30.0×〔10.7〕	11.6	－		
	91	43	445	2	中央部	ＳＸ127上層	肥前系白釉碗	(9.6)	7.3	4.9		
	92	45	513	2	中央部	ＳＸ127最下層	肥前系京焼風碗	10.0	6.0	5.0	高台内：銘	18Ｃ前半
	93	44	431・444・463・513・1325・1326	2	中央部	ＳＸ127上層・同　最下層・同　土壌選別・同　最下層土壌選別	嬉野窯銅緑釉皿	12.6	3.6	4.6		18Ｃ前半
	94	46	697	2	中央部	ＳＸ127最下層	唐津窯灰釉丸皿	13.3	3.9	4.5	界線文、砂目	17Ｃ２/4
	95	41	328・435・443	2	中央部	ＳＸ127上層	嬉野窯褐釉端反皿	13.4	4.1	4.9		17Ｃ２/4
	96	42	427・436	2	中央部	ＳＸ127上層	嬉野窯褐釉端反皿	13.6	3.9	4.9		17Ｃ２/4
	97	39	250・443	2	中央部	ＳＸ127上層・ＳＢ201上面整地層	嬉野窯銅緑釉皿	19.8	5.9	5.8		18Ｃ前半
	98	40	440	2	中央部	ＳＸ127上層	嬉野窯灰釉稜花皿	20.7	6.7	6.5		
65	99	49	696	2	中央部	ＳＸ127最下層	肥前窯碗	(10.8)	6.3	4.2	草花文	18Ｃ前半
	100	50	513・767・856	2	中央部	ＳＸ127最下層	肥前窯碗	9.8	6.4	5.0	宝づくし文	18Ｃ前半
	101	51	513・696	2	中央部	ＳＸ127最下層	肥前窯小坏	7.6	5.4	3.6		18Ｃ前半
	102	52	1325	2	中央部	ＳＸ127土壌選別	肥前窯小坏	(7.2)	4.7	3.1		
	103	47	696・699	2	中央部	ＳＸ127最下層	波佐見窯染付丸皿	12.8	3.9	4.9	鳳凰文？	18Ｃ前半
	104	48	513	2	中央部	ＳＸ127最下層	波佐見窯染付蓋碗蓋	9.7	3.2	－	八ッ橋文	18Ｃ前半
	105	100	564	2	中央部	ＳＸ209	肥前系灰釉碗	(11.3)	7.0	4.8		18Ｃ前半
	106	101	849	2	中央部	ＳＸ209	初期伊万里染付皿	(12.3)	3.0	(4.4)	草花文	17Ｃ２/4
	107	31	551	2	中央部	ＳＢ202焼土面	土師器皿（灯明皿）	7.25	1.4	6.95	回転糸切り	
	108	32	786	2	中央部	ＳＢ202カマドカマド①	土師器皿（灯明皿）	8.5	1.75	7.0	糸切り	
	109	76	363	2	中央部	ＳＢ202上面整地層	唐津窯褐色釉折縁皿	(12.8)	3.2	5.4	砂目	17Ｃ２/4
	110	78	341	2	中央部	ＳＢ202上面焼土	初期伊万里染付皿	－	〔1.2〕	4.2	花文	17Ｃ２/4
	111	77	159・350・808	2	中央部	整地層・ＳＢ202上面整地層・ＳＢ201床面	唐津窯黒褐色釉片口鉢	19.0	10.8	9.0		17Ｃ２/4
	112	79	770・909	2	中央部	ＳＢ202イロリ（東）・ＳＢ202北側	丹波窯擂鉢	(24.9)	11.1	11.4	擂目７本、長谷川ＩB2（クシ）類	17Ｃ2/4
	113	38	999	2	中央部	ＳＢ204イロリ東側	土師器皿	7.5	1.45	6.4	回転糸切り	
	114	36	987	2	中央部	ＳＢ204カマド付近	土師器皿	(7.5)	1.6	(6.4)	回転糸切り	
	115	35	672	2	中央部	ＳＢ204焼土面	土師器皿	7.7	1.55	6.6	回転糸切り	
	116	37	996	2	中央部	ＳＢ204イロリ東側	土師器皿	7.85	1.55	6.9	回転糸切り	

掲載図番号	遺物番号	実測番号	R番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
65	117	34	672	2	中央部	ＳＢ204焼土面	土師器皿	(7.9)	1.6	(6.1)	二次焼成、糸切り	
	118	33	556	2	中央部	ＳＢ204カマド②	土師器皿（灯明皿？）	7.95	1.6	6.55	回転糸切り	
	119	80	354	2	中央部	ＳＢ204上面焼土	備前窯蓋	最大径7.9	3.2	(4.1)	つまみ径1.0cm	17Ｃ初
	120	52	497	2	中央部	ＳＸ201	土師器皿	7.75	1.9	6.7	回転糸切り	
	121	53	497	2	中央部	ＳＸ201	土師器皿	7.95	1.45	6.7	回転糸切り	
	122	57	562	2	中央部	ＳＸ208検出中	土師器皿	6.7	1.3	3.2	回転糸切り	
	123	58	588・599	2	中央部	ＳＸ208	土師器皿	(7.6)	1.55	(5.7)	回転？糸切り	
	124	97	562	2	中央部	ＳＸ208検出中	唐津窯灰釉皿	(11.8)	3.0	(5.0)	砂目	17Ｃ２/4
	125	98	599	2	中央部	ＳＸ208	丹波窯火入れ	(15.0)	6.3	(12.0)		
	126	99	944	2	中央部	ＳＸ208掘形	初期伊万里染付綾花皿	(14.0)	2.9	(5.2)	草花文、口紅	17Ｃ２/4
	127	96	554	2	中央部	ＳＸ207検出中	産地不明磁器水滴？	5.0×3.6	1.9	－		
	128	107	385	2	中央部	精査中（ＳＸ124内遺物混入可能性有）	土師器炮烙	22.6	〔5.5〕	－	難波Ｅ類？	
	129	54	465	2	中央部	遺構面（ＳＸ127の東側）	唐津窯碗	(9.0)	6.7	4.8		
	130	55	464	2	中央部	遺構面（ＳＸ127の東側）	波佐見窯染付碗	10.7	6.4	4.3	梅花文	
	131	108	385	2	中央部	精査中（ＳＸ124内遺物混入可能性有）	波佐見窯染付皿	(13.1)	3.2	8.0	五弁花文、ハリ支え	18Ｃ前半
66	132	39	170	2	西部	ＳＢ205上面整地層	土師器皿	7.2	1.6	6.3	回転糸切り	
	133	84	643・691	2	西部	ＳＢ205上面・ＳＢ305土間内貝層	備前窯徳利	－	〔4.2〕	5.7		
	134	81	604・643	2	西部	ＳＢ205ベース層・ＳＢ205上面	波佐見窯染付碗	8.8	6.7	3.7	一重網目文	17Ｃ後半
	135	85	571・643・691・1379	2	西部	ＳＢ205床面・同　ベース層・ＳＢ305土間内貝層・ＳＢ305　土間貝層土壌選別	初期伊万里染付灰釉皿	(13.2)	3.6	5.0		17Ｃ２/4
	136	48	640	2	西部	ＳＢ206上面	土師器皿（灯明皿）	7.15	1.65	5.9	回転糸切り	
	137	60	609	2	西部	ＳＸ210	土師器皿（灯明皿）	6.6	1.65	4.9	回転糸切り	
	138	61	609	2	西部	ＳＸ210	土師器皿（灯明皿）	6.6	4.9	1.7	回転糸切り	
	139	102	609	2	西部	ＳＸ210	土師器皿（灯明皿）	9.7	2.0	－	底部穿孔あり	
	140	103	609	2	西部	ＳＸ210	土師器皿（灯明皿）	9.1	2.8	－	柿釉、回転ヘラ切り	18Ｃ前半
	141	104	609	2	西部	ＳＸ210	嬉野窯銅緑釉皿	(12.2)	4.0	4.5	二次焼成？	18Ｃ前半
	142	105	609	2	西部	ＳＸ210	波佐見窯染付碗	11.2	5.7	4.3	草花文	18Ｃ前半
	143	106	609	2	西部	ＳＸ210	波佐見窯染付碗	10.0	5.5	4.5	八ッ橋草花文	18Ｃ前半
	144	119	615		東部	整地層	土師器焼塩壺	－	〔6.9〕	5.5	体部外面刻印「泉湊伊織」、身：小川Ⅱ類？、刻印：小川ａ類	
	145	124	975		東部	整地層（下）	瀬戸美濃窯碗	(7.7)	5.9	3.5		
	146	125	973		東部	整地層（下）	瀬戸美濃窯碗	(6.8)	4.9	3.0		
	147	131	1042		東部	整地層（下）	産地不明　陶器仏花瓶？	7.0	3.7	5.0		
	148	132	1119		東部	整地層（下）	唐津窯皿	(12.7)	4.1	4.0	砂目、高台内：墨書（文字不明）	
	149	118	674・908		東部	整地層	唐津窯大皿	(20.5)	6.6	6.4	刷毛目文	
	150	115	680		東部	整地層	備前窯？火入れ？	11.0	5.9	11.4	底部外面：刻印	
	151	116	908		東部	整地層	丹波窯火入れ	(12.0)	6.7	(9.6)	把手残存	
	152	117	908		東部	整地層	丹波窯火入れ	(11.4)	5.6	9.0		
	153	122	736・893		東部	整地層・整地層（下）	唐津窯三島手鉢	28.3	9.2	11.0	砂目	17Ｃ後半
67	154	113	717		東部	整地層	波佐見窯染付碗	10.5	6.0	4.2	草花文	18Ｃ前半
	155	127	1035		東部	整地層（下）	波佐見窯染付碗	(9.6)	5.4	4.3	草花文、見込み付着物	
	156	128	941		東部	整地層（下）	波佐見窯染付小碗	－	〔5.4〕	3.5	一重網目文	
	157	114	612		東部	整地層	波佐見窯染付香炉	(10.3)	7.4	6.1		
	158	126	974・1008		東部	整地層（下）	波佐見窯染付猪口	9.4	6.7	6.0	八ッ橋梅花文、見込み五弁花、高台内銘	18Ｃ半ば
	159	130	1039		東部	整地層（下）	初期伊万里染付皿	(14.2)	3.7	6.0	「日」字	
	160	111	737		東部	整地層	波佐見窯染付皿	12.7	3.1	8.2	手書き五弁花	18Ｃ前半
	161	112	615		東部	整地層	波佐見窯染付皿	13.0	2.9	8.0		18Ｃ前半
	162	129	1035		東部	整地層（下）	波佐見窯染付小坏	－	3.1	－	笹文？	
	163	120	736		東部	整地層	産地不明　磁器合子（飯事道具）	(4.2)	1.5	(2.2)		
	164	123	677		東部	整地層（下）	波佐見窯染付仏飯具	(8.8)	6.4	4.3		
	165	110	908		東部	整地層	波佐見窯青磁香炉	7.2	5.4	5.6	聞香炉、中国製模倣	
	166	109	908・1016		東部	整地層	肥前窯皿	(20.6)	3.0	(12.4)		
	167	121	615		東部	整地層	漳州窯青花大皿	－	〔2.9〕	(15.8)		
	168	50	1103		東部	ＳＢ209土間ベース土	土師器皿	8.05	2.15	3.55		
	169	49	1103		東部	ＳＢ209土間ベース土	土師器皿	8.2	2.0	4.4		
	170	51	1103		東部	ＳＢ209土間ベース土	土師器皿（灯明皿）	8.6	1.95	5.05		
	171	92	1103	2	東部	ＳＢ209土間ベース土	土師器焼塩壺	5.0	8.6	4.6	体部外面：文様？、小川Ⅰ類	17Ｃ２/4
	172	40	602		西部	ＳＢ205ベース層	土師器皿	6.5	1.25	6.2		
	173	41	566		西部	ＳＢ205ベース層	土師器皿（灯明皿）	6.2	1.4	4.8	回転糸切り	
	174	45	602		西部	ＳＢ205ベース層	土師器皿	7.1	1.25	5.75	回転糸切り	
	175	44	571		西部	ＳＢ205ベース層	土師器皿	7.4	1.6	6.6	回転糸切り	
	176	43	571		西部	ＳＢ205ベース層	土師器皿（灯明皿）	7.6	1.3	6.5	回転糸切り	
	177	42	566・567		西部	ＳＢ205ベース層	土師器皿	7.6	1.35	6.75	回転糸切り	

掲載図番号	遺物番号	実測番号	R番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
67	178	89	571・1379	2	西部	ＳＢ205ベース層・ＳＢ305土間貝層土壌選別	京焼風施釉陶器淡茶灰色埦	(9.2)	6.9	5.4		18Ｃ前半
	179	90	567・691	2	西部	ＳＢ205ベース層・ＳＢ305土間貝層	瀬戸美濃窯菊皿	(13.1)	2.9	7.6		18Ｃ前半
	180	86	034・566	2	西部	精査中・ＳＢ205ベース層	丹波窯擂鉢	－	〔9.1〕	13.0	擂目８本	18Ｃ前半
	181	87	549・575	2	西部	整地層・ＳＢ205ベース層	備前窯？油壺	(4.0)	〔8.4〕	5.2	墨書	18Ｃ
	182	88	566・567	2	西部	ＳＢ205ベース層	波佐見窯染付碗	－	〔9.8〕	(7.0)	一重網目文	18Ｃ前半
68	183	191	950	3	東部	ＳＸ313・ＳＸ316切り合い部分	備前窯受付皿	8.6	1.6	－	灯明皿	18Ｃ前半
	184	188	876	3	東部	ＳＸ313 ３層	唐津窯褐釉徳利	－	〔8.5〕	8.4		18Ｃ前半
	185	187	874・875・876・903	3	東部	ＳＸ313 １層・同２層・同３層・ＳＸ315掘形検出中	丹波窯緑釉掛け流し鉢	15.1	10.9	12.5		18Ｃ
	186	189	875	3	東部	ＳＸ313 ２層	波佐見窯染付碗	9.9	5.2	3.5	梅花文、高台内銘	18Ｃ前半
	187	190	092・318・874	3	東部	精査中・ＳＸ313 １層	波佐見窯染付徳利	2.0	14.9	(4.5)	蛸唐草文	18Ｃ
	188	90	951	3	東部	ＳＸ315	土師器皿（灯明皿）	7.7	1.6	6.1		
	189	91	976	3	東部	ＳＸ315石組み内	土師器皿	8.3	1.9	6.85		
	190	193	596・874・1044	3	東部	ＳＫ124・ＳＸ313 １層・ＳＸ315	波佐見窯染付碗	9.6	7.0	4.2	よろけ縞文	1700年前後
	191	195	1065	3	東部	ＳＸ315	波佐見窯染付碗	(11.7)	5.8	4.1	界線文	18Ｃ前半
	192	194	1065・1132	3	東部	ＳＸ315・同　掘形	景徳鎮窯青花皿	(13.5)	2.6	(8.0)	花鳥文	16Ｃ後半
	193	192	903	3	東部	ＳＸ315掘形検出中	波佐見窯染付皿	(20.3)	4.1	(11.0)	家屋文、高台内銘	18Ｃ前半
	194	100	832	3	東部	ＳＸ351	土師器皿	(7.4)	1.7	(6.0)	回転糸切り	
	195	101	1088	3	東部	ＳＸ351下部	土師器皿	(7.6)	1.7	(6.2)	回転糸切り	
	196	267	678・683・684・773・792	3	東部	ＳＫ351・ＳＸ351検出中・整地層・ＳＸ303・ＳＸ304・ＳＫ305断割中・ＳＸ351	土師器皿	11.4	1.9	5.2	灯明皿、柿釉	
	197	269	1088	3	東部	ＳＸ351下部	土鈴	－	〔4.2〕	－	最大径5.2cm	
	198	268	773・792・1088・1091・1094	3	東部	ＳＸ351・同　下部・同　下位南半	土師器炮烙	(24.8)	7.7	－	難波Ａ類	
	199	81	742	3	東部	ＳＫ301東半１層	土師器皿	6.15	1.55	4.95	回転糸切り	
	200	77	742	3	東部	ＳＫ301東半１層	土師器皿	6.2	1.65	5.0	回転糸切り	
	201	76	742	3	東部	ＳＫ301東半１層	土師器皿（灯明皿）	6.3	1.5	4.6	糸切り	
	202	72	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.35	1.55	4.55	回転糸切り	
	203	75	742	3	東部	ＳＫ301東半１層	土師器皿	6.35	1.6	4.6	回転糸切り	
	204	70	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.35	1.65	4.7	回転糸切り	
	205	67	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.4	1.5	4.5	回転糸切り	
	206	68	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿	6.4	1.7	4.6	回転糸切り	
	207	66	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.4	1.5	4.7	回転糸切り（不鮮明）	
	208	80	777	3	東部	ＳＫ301西半	土師器皿（灯明皿）	6.45	1.6	4.55	回転糸切り（不鮮明）	
	209	62	621	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.45	1.6	4.6	回転糸切り	
	210	63	621	3	東部	ＳＫ301	土師器皿	6.45	1.45	5.15	回転糸切り	
	211	82	742	3	東部	ＳＫ301東半１層	土師器皿	6.5	1.45	5.0	回転糸切り	
	212	79	777	3	東部	ＳＫ301西半	土師器皿（灯明皿）	6.55	1.7	4.9	糸切り？	
	213	69	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿	6.6	1.7	4.5	回転糸切り（不鮮明）	
	214	71	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿？）	6.6	1.5	4.7	回転糸切り（不鮮明）	
	215	64	621	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.8	1.45	4.3		
	216	73	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.85	1.5	4.45	回転糸切り	
	217	65	621	3	東部	ＳＫ301	土師器皿（灯明皿）	6.9	1.5	4.8	糸切り？（摩耗）	
	218	74	621・722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿	8.5	2.0	6.5	回転糸切り（不鮮明）	
	219	83	742・748	3	東部	ＳＫ301東半１層	土師器皿	(10.8)	1.7	(5.95)	回転糸切り	
	220	146	722	3	東部	ＳＫ301	土師器皿	(9.4)	1.5	(6.8)	墨書「の」、回転糸切り	18Ｃ前半
	221	147	621・722・742	3	東部	ＳＫ301・同　東半１層	土師器受付皿	(11.6)	1.9	－	灯明皿、柿釉、回転ヘラケズリ	18Ｃ前半
	222	99	681	3	東部	ＳＫ301	備前窯皿（灯明皿）	11.0	2.0	4.8	回転ヘラケズリ	18Ｃ前半
	223	148	776	3	東部	ＳＫ301・同　東半２～３層	土師器炮烙	26.0	〔6.8〕	－	難波Ｄ類	
	224	149	681・722・742・748・772・776	3	東部	ＳＫ301・同　東半１層・同　東半２～３層	土師器炮烙	28.0	6.7	－	難波Ｅ類	
	225	143	621・722	3	東部	ＳＫ301	肥前系京焼風碗	12.8	5.3	4.6	楼閣山水文、高台内銘	18Ｃ初
	226	144	722	3	東部	ＳＫ301	唐津窯碗	－	〔6.2〕	6.0	刷毛目文	18Ｃ前半
	227	145	681	3	東部	ＳＫ301	嬉野窯銅緑釉香炉	(9.4)	5.9	4.6		18Ｃ前半
69	228	133	681・772	3	東部	ＳＫ301・同　東半２～３層	波佐見窯白磁碗	(11.5)	6.3	(5.0)	藤文：陽刻	18Ｃ前半
	229	134	681	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付碗	9.4	5.2	3.6	竹文、高台内銘	18Ｃ前半
	230	139	620・742	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付碗	9.6	5.5	4.0	笹文、高台内銘	18Ｃ前半
	231	135	621	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付碗	(10.0)	5.5	3.9	草花文	18Ｃ前半
	232	137	748	3	東部	ＳＫ301東半１層	波佐見窯白磁小碗	(8.0)	4.9	3.2		18Ｃ前半
	233	136	621・722	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付小碗	8.1	4.5	3.5	桐文	18Ｃ前半
	234	138	598・615・620・621・742	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付皿	12.5	3.5	7.0	五弁花文	18Ｃ前半

掲載図番号	遺物番号	実測番号	R番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
69	235	142	681	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付油壷	3.7	〔5.2〕	－		18Ｃ前半
	236	140	612・681	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付小坏	6.5	4.9	(3.9)	雨降り文	18Ｃ前半
	237	141	042・331・455・612・681・722＋331・359・681	3	東部	ＳＫ301	波佐見窯染付綾花鉢	(20.2)	7.5	(10.6)	牡丹唐草文	18Ｃ前半
	238	84	625	3	東部	ＳＫ302	土師器皿	(7.0)	1.45	6.15	回転糸切り	
	239	150	836・884	3	東部	ＳＫ302南部	土師器炮烙	25.0	7.0	－	難波Ｃ類？	
	240	151	657	3	東部	ＳＫ302	嬉野窯銅緑釉皿	(13.0)	3.0	4.6		18Ｃ前半？
	241	159	815	3	東部	ＳＫ303	肥前系陶器掛け分け碗	(15.2)	8.6	(6.0)		18Ｃ前半
	242	156	815	3	東部	ＳＫ303	嬉野窯銅緑釉皿	11.4	3.5	3.9		18Ｃ前半
	243	161	625・650・815・977・1012・1048・1056・1204・1235	3	東部	ＳＫ302・ＳＫ303・ＳＸ316・整地層（下）・ＳＸ324・ＳＸ404検出中	唐津窯大鉢	(38.4)	9.8	(13.5)	刷毛目文	18Ｃ前半
	244	152	1041	3	東部	ＳＫ303	波佐見窯染付碗	(10.6)	5.7	4.1		18Ｃ前半
	245	153	1041・1085・1172	3	東部	ＳＫ303・ＳＸ353・ＳＫ403	波佐見窯白磁輪花碗	(10.3)	7.0	4.6		18Ｃ前半
	246	160	069・815・1328	3	東部	撹乱坑10・ＳＫ303・ＳＸ128土壌選別	波佐見窯染付香炉	(10.9)	7.3	5.8		18Ｃ前半
	247	154	1041	3	東部	ＳＫ303	波佐見窯白磁皿	(7.2)	3.1	3.4		18Ｃ前半
	248	155	1041・1134	3	東部	ＳＫ303・ＳＸ324	波佐見窯白磁皿	(6.4)	2.0	3.0		18Ｃ前半
	249	158	815・1041	3	東部	ＳＫ303	波佐見窯白磁端反皿	(11.8)	2.5	5.9		18Ｃ前半
	250	157	815	3	東部	ＳＫ303	唐津窯染付仏飯具	(7.6)	6.1	(4.0)		18Ｃ前半
	251	162	815・1088	3	東部	ＳＫ303・ＳＸ351下部	産地不明　磁器水滴	長さ5.3	2.6	幅4.3	口径0.8	
70	252	163	735・743	3	東部	ＳＫ307・ＳＫ307の南側	瓦質土器羽釜（飯事道具）	－	〔4.2〕	－		
	253	85	745	3	東部	ＳＫ308	土師器皿	7.8	1.6	6.3	回転糸切り	
	254	212	746	3	東部	ＳＫ308断割中（下層の砂利層上面）	土師器皿	7.0	1.2	6.6	底部内外面：墨書（判読不能）	18Ｃ前半
	255	88	1296	3	東部	ＳＸ301下層	土師器皿	(4.8)	2.0	6.6	回転糸切り	
	256	86	623	3	東部	ＳＸ301	土師器皿	(10.5)	1.9	5.0	回転糸切り	
	257	87	682・750	3	東部	ＳＸ301・整地層	土師器皿	10.5	1.75	5.4	回転糸切り	
	258	172	658・814	3	東部	ＳＸ301	唐津窯碗	(10.9)	6.4	4.0	刷毛目文	18Ｃ前半
	259	176	1296	3	東部	ＳＸ301下層	嬉野窯銅緑釉皿	11.7	3.6	4.5		18Ｃ前半
	260	167	682	3	東部	ＳＸ301	波佐見窯染付碗	(9.8)	5.7	3.9	草花文、高台内銘	18Ｃ前半
	261	169	682	3	東部	ＳＸ301	波佐見窯染付碗	9.1	5.4	3.9	松文、高台内銘	18Ｃ前半
	262	168	715	3	東部	ＳＸ301	波佐見窯染付碗	(9.5)	5.2	3.5	松竹文	18Ｃ前半
	263	171	626・1296	3	東部	ＳＸ303・ＳＸ301下層	波佐見窯染付碗	(10.4)	6.0	3.9	鳥文	18Ｃ前半
	264	175	747	3	東部	ＳＸ301下層	波佐見窯染付皿	(13.7)	3.1	7.8	波文、墨弾き、口紅、高台内銘	17Ｃ後半
	265	170	658	3	東部	ＳＸ301	波佐見窯染付仏飯具	(8.4)	6.0	4.1		18Ｃ前半
	266	177	615・620・621・623・632・658・681・682・742	3	東部	整地層・ＳＫ301・ＳＸ301・ＳＸ207・ＳＫ301東半１層	波佐見窯染付皿	18.2	3.2	11.3	鳥文、墨弾き、口紅、高台内銘	17Ｃ後半
	267	174	738・750・1153	3	東部	ＳＸ301北半・整地層（下）・ＳＫ354	波佐見窯染付芙蓉手皿	(21.1)	3.6	(11.6)	ハリ支え	17Ｃ後半
	268	173	247・626・715・1296	3	東部	撹乱・ＳＸ303・ＳＸ301（主に下層）・同　下層	波佐見窯染付徳利	－	〔9.6〕	7.0	草花文	18Ｃ前半
71	269	89	679	3	東部	ＳＸ302	土師器皿	6.8	1.45	4.85	回転糸切り	
	270	181	624	3	東部	ＳＸ302	瀬戸美濃窯折縁皿	(13.0)	2.4	7.1		18Ｃ前半
	271	178	598・615・620・668・775・901・1314	3	東部	ＳＸ302・ＳＸ303西部・整地層・ＳＫ122土壌選別	唐津窯三島手大鉢	(34.8)	11.4	13.0	砂目	17Ｃ後半
	272	183	620・624・720・721	3	東部	整地層・ＳＸ302・同上層・同　下層	須佐窯？（唐津窯？）擂鉢	(36.6)	13.5	12.0	擂目15本	
	273	180	626・721	3	東部	ＳＸ302下層・ＳＸ303	波佐見窯染付碗	(10.7)	6.3	4.2	草花文、高台内銘	18Ｃ前半
	274	182	624	3	東部	ＳＸ302	波佐見窯染付小碗	(8.4)	5.0	(3.1)	鳥文	18Ｃ前半
	275	179	620・656・794	3	東部	整地層・ＳＸ302・ＳＸ303南端	漳州窯青花盤	(25.4)	(5.0)	13.0	不死鳥文	16Ｃ末～17Ｃ初
72	276	184	337・974・1002・1005・1012・1030	3	東部	精査中・整地層（下）・ＳＸ318・ＳＸ306	波佐見窯染付皿	20.8	2.7	10.1	岩鳥文	17Ｃ後半
	277	185	949	3	東部	ＳＸ308	波佐見窯染付皿	(13.0)	3.2	(8.1)		18Ｃ前半
	278	186	949	3	東部	ＳＸ308	産地不明　施釉陶器小壷？	－	〔3.0〕	3.7		18Ｃ前半
	279	94	1090	3	東部	ＳＸ316東端	土師器皿	7.25	1.3	3.8		
	280	92	1089・1090	3	東部	ＳＸ316東端	土師器皿	6.75	1.45	5.0	回転糸切り	
	281	93	1082	3	東部	ＳＸ316東半	土師器皿	6.95	1.8	4.25	回転糸切り	
	282	96	1080	3	東部	ＳＸ316西半	土師器皿	(7.4)	1.1	(6.9)	回転糸切り	
	283	97	1056	3	東部	ＳＸ316西半	土師器皿（灯明皿）	8.0	1.9	6.4	回転糸切り	
	284	95	1047	3	東部	ＳＸ316東半	土師器皿（灯明皿）	8.4	1.95	6.45	回転糸切り	
	285	98	1089	3	東部	ＳＸ316東端	備前窯皿（灯明皿）	(8.4)	1.3	4.2	回転ヘラケズリ	18Ｃ前半
	286	211	1089・1090	3	東部	ＳＸ316東端	嬉野窯掛け分け埦	11.2	4.3	4.9		18Ｃ前半

掲載図番号	遺物番号	実測番号	R番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
72	287	241	677・907・1056・1100	3	東部	整地層・ＳＸ316西半・同　石集中部	唐津窯碗	(10.7)	6.9	(4.8)	刷毛目文	18Ｃ前半
	288	210	1090	3	東部	ＳＸ316東端	肥前系施釉陶器碗	(8.9)	6.9	(4.5)		18Ｃ前半
	289	222	1082・1089・1090	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	京焼風碗	9.0	5.4	4.8	山水文、高台内銘	18Ｃ前半
	290	242	615・1056	3	東部	整地層・ＳＸ316西半	京焼風碗	(8.8)	5.5	5.0	山水文、高台内銘	18Ｃ前半
	291	234	1110	3	東部	ＳＸ316石集中部	嬉野窯銅緑釉皿	11.8	3.5	4.5		18Ｃ前半
	292	232	1089・1110	3	東部	ＳＸ316　東端・同石集中部	嬉野窯白釉皿	12.1	4.3	4.5		18Ｃ前半
	293	202	977	3	東部	ＳＸ316	丹波窯火入れ	(11.8)	6.8	(8.4)		
	294	244	806・977・1056	3	東部	石列周囲精査中・ＳＸ316・同　西半	京焼系香炉	(12.2)	7.5	(7.0)	山水文	18Ｃ前半
	295	243	1056・1080	3	東部	ＳＸ316西半	京焼風香炉	7.3	〔6.6〕	7.3		18Ｃ前半
	296	245	1047・1080	3	東部	ＳＸ316東半・同　西半	丹波窯鉄釉片口壺	6.4	9.4	7.0		18Ｃ前半
	297	246	1056	3	東部	ＳＸ316西半	唐津窯鉄釉壺	7.8	13.1	5.4		18Ｃ前半
	298	200	613	3	東部	整地層	肥前（唐津？）窯壺	(21.0)	〔7.1〕	－	刷毛目文	17Ｃ後半
		201	374・907	3	東部	ＳＸ107・ＳＸ316	肥前（唐津？）窯壺	－	〔12.4〕	10.5	刷毛目文	
	299	213	1085	3	東部	ＳＸ353	唐津窯鉢	(19.0)	〔7.7〕	－	刷毛目文	17Ｃ後半
	300	214	1089	3	東部	ＳＸ316東端	唐津窯鉢	－	〔5.6〕	(9.1)	刷毛目文	17Ｃ後半
	301	208	1090・1111	3	東部	ＳＸ316東端	土師器在地系灯火具（瓦灯状）	－	13.5	－		18Ｃ
		209	1090	3	東部	ＳＸ316東端	土師器在地系灯火具（瓦灯状）	－		7.4		
	302	236	1100	3	東部	ＳＸ316石集中部	唐津窯鉢	(21.7)	8.3	(9.0)		18Ｃ前半
73	303	235	1100・1228	3	東部	ＳＸ316石集中部・同　石集中部下層	唐津窯片口鉢	20.3	11.0	8.7	刷毛目文	17Ｃ後半
	304	247	1056・1080・1084	3	東部	ＳＸ316西半・同　西側断面	唐津窯二彩手鉢	－	〔9.9〕	(13.0)		18Ｃ前半
	305	256	1060	3	東部	ＳＸ316西端	丹波窯甕	18.0	〔11.9〕	－		18Ｃ
	306	237	1100	3	東部	ＳＸ316石集中部	唐津窯擂鉢	(37.0)	〔7.5〕	－	擂目11本	18Ｃ前半
	307	248	1056・1084	3	東部	ＳＸ316西半・同　西側断面	唐津窯擂鉢	(33.8)	〔7.9〕	－	擂目11本	18Ｃ前半
	308	215	1089	3	東部	ＳＸ316東端	備前窯擂鉢	(31.8)	14.2	(18.0)	擂目10本	18Ｃ前半
	309	196	613・715・905・947・1034・1047	3	東部	整地層・ＳＫ123掘形内精査中・ＳＸ316検出中・同　西半・同東半	瀬戸美濃窯擂鉢	(32.8)	13.8	(14.0)	擂目15本	
	310	249	1014・1080	3	東部	整地層（下）・ＳＸ316西半	丹波窯甕	(42.8)	〔16.0〕	－	長谷川ⅣA2a類、不遊環	18Ｃ
74	311	225	1082・1090	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	波佐見窯白磁碗	9.6	5.5	4.0	口紅	18Ｃ前半
	312	252	1056	3	東部	ＳＸ316西半	波佐見窯白磁碗	(10.1)	5.8	(4.4)		18Ｃ前半
	313	216	958・1089	3	東部	ＳＸ315掘形・ＳＸ316東端	波佐見窯白磁碗	9.0	5.5	3.6	口紅	18Ｃ前半
	314	229	1110・1125	3	東部	ＳＸ316石集中部・同東端	波佐見窯染付碗	9.3	5.0	3.8	草花文、高台内銘	18Ｃ前半
	315	227	1082・1089	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	波佐見窯染付碗	9.8	5.6	3.8		18Ｃ前半
	316	226	1082・1089	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	波佐見窯染付碗	(10.3)	5.5	4.1	楓文	18Ｃ前半
	317	224	1082・1089	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	波佐見窯染付碗	(9.8)	5.5	(4.7)	七宝文	18Ｃ前半
	318	251	1056	3	東部	ＳＸ316西半	波佐見窯染付碗	(9.2)	6.6	5.5	八ッ橋草花文	18Ｃ前半
	319	250	1056	3	東部	ＳＸ316西半	漳州窯青花碗	(11.0)	5.1	(4.6)	童子文	16Ｃ末～17Ｃ初
	320	203	977・1041	3	東部	ＳＸ316・ＳＫ303	波佐見窯染付碗	(11.6)	5.2	4.2	菊文	18Ｃ前半
	321	240	1210	3	東部	ＳＸ316石集中部下層	波佐見窯染付碗	(12.2)	5.0	4.6	界線文	18Ｃ前半
	322	223	1082・1089	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	波佐見窯染付碗	8.5	4.6	3.4	楓文	18Ｃ前半
	323	204	907	3	東部	ＳＸ316	波佐見窯染付小坏	(8.0)	4.3	3.0	雨降り文	17Ｃ後半
	324	217	1125	3	東部	ＳＸ316東端	波佐見窯染付小碗	(7.2)	4.2	(3.8)	桐文	18Ｃ半ば
	325	238	1110	3	東部	ＳＸ316石集中部	波佐見窯染付坏	6.3	2.8	2.9	雨降り文	18Ｃ前半
	326	221	1089	3	東部	ＳＸ316東端	波佐見窯染付仏飯具	7.4	5.1	3.8	雨降り文	18Ｃ前半
	327	220	1089・1090・1094	3	東部	ＳＸ316東端・ＳＸ351下位南半	波佐見窯染付猪口	7.7	5.3	4.2	草花文、高台内銘	18Ｃ前半
	328	231	1110・1125	3	東部	ＳＸ316石集中部・同　東端	波佐見窯染付猪口	6.9	5.5	4.3	梅花文、高台内銘	18Ｃ前半
	329	205	977・1041	3	東部	ＳＸ316・ＳＫ303	波佐見窯染付猪口	7.4	5.4	3.7	八ッ橋文	18Ｃ前半
	330	253	1082	3	東部	ＳＸ316西半	波佐見窯白磁小坏	(5.8)	4.1	3.9		18Ｃ前半
	331	228	1082・1089	3	東部	ＳＸ316東半・同東端	波佐見窯染付香炉	12.0	8.7	7.3	唐草文	18Ｃ前半
	332	197	947・977	3	東部	ＳＸ316検出中・ＳＸ316	波佐見窯染付皿	(12.4)	3.9	4.0	二重斜格子文	18Ｃ前半
	333	219	1089	3	東部	ＳＸ316東端	波佐見窯染付皿	(12.4)	3.7	(6.8)	草花文	18Ｃ前半
	334	218	1125	3	東部	ＳＸ316東端	波佐見窯染付皿	14.4	3.6	7.5	唐草文	18Ｃ前半
	335	198	947	3	東部	ＳＸ316検出中	波佐見窯染付皿	(13.0)	2.7	(7.6)	五弁花文	18Ｃ前半
	336	199	334・593・947	3	東部	精査中・整地層・ＳＸ316検出中	波佐見窯染付皿	12.3	3.6	4.2	折れ松葉文	18Ｃ前半
	337	230	1090・1110	3	東部	ＳＸ316東端・同　石集中部	波佐見窯染付小皿	9.1	2.6	4.0		18Ｃ前半
	338	254	662・677・1056・1080	3	東部	ＳＸ310・整地層（下）・ＳＸ316西半	波佐見窯染付皿	－	〔2.3〕	12.1	牡丹唐草文	18Ｃ前半
	339	255	1056・1080	3	東部	ＳＸ316西半	波佐見窯染付皿	12.8	2.8	7.7	柳文	18Ｃ後半
	340	233	1082・1110＋626・1082	3	東部	整地層・第４遺構面ベース層・ＳＸ303・ＳＸ316東半・同　石集中部	波佐見窯染付芙蓉手鉢	(19.6)	〔4.3〕	－		18Ｃ前半
	341	207	1110	3	東部	ＳＸ316	波佐見窯青磁鉢	(21.2)	6.2	(6.4)		18Ｃ前半
	342	239	1110	3	東部	ＳＸ316石集中部	波佐見窯染付徳利	3.8	〔7.8〕	－		18Ｃ前半
	343	206	377・707・907	3	東部	ＳＫ123・ＳＫ310・ＳＸ316	波佐見窯染付徳利	－	〔11.0〕	6.4	草花文	18Ｃ前半

掲載図番号	遺物番号	実測番号	R番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
75	344	257	1002・1005	3	東部	ＳＸ318	土師器炮烙	25.5	7.4	－	難波D類、口縁2孔残存	
	345	258	1006	3	東部	ＳＸ320	土師器炮烙	26.0	8.0	－	難波D類、口縁2孔1対	
	346	260	1117	3	東部	ＳＸ323	波佐見窯染付皿	12.8	3.9	4.0	松葉文？	18Ｃ前半
	347	261	1117	3	東部	ＳＸ323	初期伊万里染付皿	(9.4)	2.8	3.1		17Ｃ2/4
	348	259	1117	3	東部	ＳＸ323	瀬戸美濃窯白釉片口鉢	15.4	11.1	7.7		18Ｃ前半
	349	265	1058・1085・1134	3	東部	ＳＫ303・ＳＸ353・ＳＸ324	肥前系京焼風陶器皿	12.7	4.5	4.7	高台内銘	18Ｃ前半
	350	263	1134	3	東部	ＳＸ324	唐津窯淡緑色釉皿	(12.2)	3.4	(4.0)	砂目	17Ｃ2/4
	351	266	1058・1060・1135	3	東部	ＳＫ303・ＳＸ316西端・ＳＸ324下層周辺	波佐見窯染付碗	9.8	5.3	4.0	草花文	18Ｃ前半
	352	264	1134	3	東部	ＳＸ324	波佐見窯白磁小碗	(9.4)	4.9	(3.4)	口紅	18Ｃ前半
	353	262	1134・1172	3	東部	ＳＸ324・ＳＫ403	波佐見窯染付皿	12.85	3.4	7.4	扇梅花文	18Ｃ前半
	354	270	1077	3	東部	ＳＸ352	肥前窯仏飯具	(8.4)	6.5	4.6	底面：墨書「大佛□木ヵ」	
	355	46	691	3	西部	ＳＢ305土間内貝層	土師器皿（灯明皿）	7.6	1.8	6.7	回転糸切り	
	356	47	691	3	西部	ＳＢ305土間内貝層	土師器皿（灯明皿）	8.05	1.6	7.35	回転糸切り	
	357	82	691	3	西部	ＳＢ305土間内貝層	産地不明（陶器？）、器種不明	－	〔14.3〕	－	体部内面：格子タタキ	
	358	83	643	2	西部	ＳＢ205上面	産地不明（陶器？）、器種不明	－	〔6.5〕	(18.0)	体部内面：格子タタキ	
	359	164	842	3	西部	ＳＫ313掘形	瀬戸美濃窯灰釉鉢	(25.3)	5.7	(14.6)		18Ｃ前半
	360	165	805	3	西部	ＳＫ313埋土	波佐見窯白磁菊皿	(12.8)	〔3.5〕	－		18Ｃ前半
	361	166	744	3	西部	ＳＰ301	土師器蛸壺	－	〔18.1〕	11.5	胞衣壺	
76	362	278	890	3	中央部	第３遺構面（ＳＢ202カマド西半南側）	丹波窯擂鉢	(20.4)	9.8	(11.0)	擂目７本	17Ｃ1/4
	363	104	1176		東部	第３遺構面ベース層	土師器焼塩壺蓋	(6.8)	1.25	4.9	小川㋐類１	17Ｃ1/4 or 2/4
	364	273	941・1166		東部	整地層（下）・第３遺構面ベース層	初期伊万里？染付碗	10.6	7.7	(5.6)	福字文	
	365	276	1141＋1152		東部	第３遺構面ベース層	丹波窯甕	(30.8)	(28.3)	(16.0)	長谷川Ⅲ1類？	
	366	271	1136・1215		中央部	第３遺構面ベース層・第４遺構面造成層	土師器三足付皿	(25.0)	8.6	－		
	367	272	1108		中央部	第３遺構面ベース層	土師器三足付皿	(24.4)	8.1	－	底部糸切り痕	
	368	275	1108		中央部	第３遺構面ベース層	唐津窯碗？	－	〔3.0〕	4.7		17Ｃ1/4
	369	277	1108		中央部	第３遺構面ベース層	産地不明磁器水滴	高さ3.6	幅5.9	厚さ〔1.5〕		
	370	274	1136		中央部	第３遺構面ベース層	産地不明　陶器瓶	－	〔13.1〕	－		
	371	103	1175	4	東部	ＳＸ403	土師器皿	7.45	1.45	6.5	回転糸切り（摩耗）	
	372	279	1187	4	中央部	ＳＢ403	唐津窯灰釉皿	(11.9)	3.2	4.4		17Ｃ1/4
	373	280	1189	4	中央部	ＳＢ403	唐津窯淡黄色釉鉢	(21.4)	〔4.9〕	－		17Ｃ2/4
	374	281	1222		中央部	ＳＢ401ベース層	唐津窯黄褐色碗	(9.8)	5.9	4.3		17Ｃ1/4
	375	102	1193		中央部	ＳＢ402ベース層	土師器皿	8.35	2.1	3.9		
	376	282	1271		中央部	ＳＢ402イロリベース層	唐津窯皮鯨手襞皿	(11.8)	3.6	(4.2)		17Ｃ1/4
	377	283	1222		中央部	ＳＢ402ベース層	唐津窯白磁皿	(14.4)	4.3	5.3		17Ｃ2/4
77	378	284	1262		東部	第４遺構面ベース層	漳州窯白磁皿	(12.4)	3.4	(6.4)		
	379	287	1269		中央部	第４遺構面ベース層	唐津窯皿	(11.0)	2.9	4.5	胎土目、口紅	
	380	286	1269		中央部	第４遺構面ベース層	瀬戸美濃窯？小天目碗	5.8	3.2	2.8		
	381	288	1269		中央部	第４遺構面ベース層	龍泉窯青磁碗	(12.2)	5.1	5.7	砂目	15Ｃ後半
	382	285	1215		中央部	第４遺構面ベース層	土師器炮烙	23.7	〔7.5〕	－	難波Ａ類	
	383	289	1215		中央部	第４遺構面造成層	唐津窯皿	(10.8)	3.2	4.2	砂目	
	384	290	1215		中央部	第４遺構面造成層	備前窯花生	－	〔6.5〕	3.6		
	385	291	1215		中央部	第４遺構面造成層	中国　白磁皿	(11.0)	2.7	6.2		
	386	295	1251		西部	第４遺構面造成層	肥前窯？碗	10.9	7.1	4.3		
	387	296	1251		西部	第４遺構面造成層	肥前窯皿	(13.3)	3.2	6.4	口紅	
	388	292	1251		西部	第４遺構面造成層	丹波窯火入れ	(12.8)	7.0	(10.2)		
	389	293	1251		西部	第４遺構面造成層	丹波窯片口鉢	(22.6)	9.9	(12.2)		
	390	294	1251		西部	第４遺構面造成層	丹波窯擂鉢	(32.3)	16.1	(13.6)	擂目５本、長谷川ⅠB2（クシ）類	
	391	297	1262・1279	5	東部・中央部	ＳＤ501・第４遺構面ベース層	漳州窯白磁端反碗	(12.4)	3.3	(6.3)		16Ｃ末～17Ｃ初
	392	298	1260	5	東部	ＳＤ501	朝鮮王朝陶磁船徳利	－	－	－		16Ｃ末～17Ｃ初
	393	299	1270	5	中央部	ＳＫ502	波佐見窯白磁碗	－	〔6.7〕	5.1	朝鮮模倣	17Ｃ後半
	394	300	1224	5	中央部	落ち込み	漳州窯青花碗	－	〔1.3〕	(4.6)		
	395	301	331		東部	精査中	土師器皿	6.5	1.5	4.8	底面：墨書「八ヵ」	
	396	302	846		西部	撹乱内	土師器皿	(5.5)	0.7	－	見込み：墨書「天道□天徳ヵ□」	
52	438	66	705	2	中央部	ＳＢ201焼土面上面	硯	長さ14.4	幅5.8	高さ1.2	145.5g	
	439	74	690	2	中央部	ＳＢ201裏焼土面直上	硯	長さ〔7.5〕	幅5.3	高さ1.4	61.5g	
	440	303	035		西部	撹乱内	硯	15.7	幅6.1	高さ2.1	299.0g	
	441	36	415	1	中央部	ＳＸ131	砥石	長さ〔11.0〕	幅3.9	厚さ3.3	196.5g	
	442	73	527	2	中央部	ＳＢ201裏焼土面直上	砥石	長さ〔8.0〕	幅4.1	厚さ(0.9)	元、硯か？48.5g	

表７　出土瓦観察表

※時期は世紀を略してＣと表記し、時期の明確なものについては１世紀内を４分割して表示している（例：17Ｃ2/4＝17世紀第２四半期）。

（　　）内の数値は推定値、〔　　〕内の数値は残存値を示す。

掲載図番号	遺物番号	実測番号	Ｒ番号	検出面	区名	出土遺構名	器種等	瓦当幅・径（cm）	瓦当高（cm）	全長（cm）	幅（cm）	高さ（cm）	厚さ（cm）	時期
78	397	334	719	3	東部	ＳＸ 303・ＳＸ 304・ＳＫ 305 断割中	軒丸瓦	(16.0)	－	〔14.7〕	－	－	－	
	398	332	973	3	東部	整地層（下）	軒丸瓦	(12.6)	－	〔3.6〕	－	－	－	
	399	319	351	2	中央部	ＳＢ 202 上面焼土	軒丸瓦	(14.0)	－	〔8.3〕	－	－	－	
	400	316	671	1	東部	ＳＸ 129 掘形	軒丸瓦	〔4.2〕	－	〔1.6〕	－	－	－	
	401	308	227・314	1	西部	ＳＫ 112	軒丸瓦	(13.6)	－	〔9.5〕	－	－	－	
	402	315	139	1	中央部	ＳＸ 113	軒丸瓦	13.2	－	〔2.5〕	－	－	－	
	403	309	227・314	1	西部	ＳＫ 112	軒丸瓦	(13.8)	－	〔4.2〕	－	－	－	
	404	321	385	2	中央部	精査中（ＳＢ 202 内？、ＳＸ 124 内遺物含む？	軒丸瓦	(13.8)	－	〔5.4〕	－	－	－	
	405	328	571	3	西部	ＳＢ 205 ベース層	軒丸瓦	(14.0)	－	〔1.5〕	－	－	－	
	406	341	752	4	西部	ＳＢ 305 ベース層	軒丸瓦	13.7	－	〔3.2〕	－	－	－	
	407	335	626	3	東部	ＳＸ 303	軒丸瓦	(14.0)	－	〔11.8〕	－	－	－	
	408	306	669	1	東部	ＳＫ 104 石組み	軒丸瓦	(16.0)	－	〔1.9〕	－	－	－	
	409	314	545	1	東部	ＳＸ 101（大半掘形内）	軒丸瓦	(14.0)	－	〔2.6〕	－	－	－	
	410	333	979	3	東部	ＳＸ 305・ＳＸ 129 切り合い部	軒丸瓦	14.0	－	〔4.9〕	－	－	－	
	411	324	375	2	東部	ＳＢ 208 上面焼土	軒丸瓦	(13.0)	－	〔2.4〕	－	－	－	
79	412	343	1215	5	中央部	第４遺構面造成層	軒平瓦	21.4	4.5	〔12.3〕	－	－	－	南北朝～室町前期
	413	342	845	4	中央部	第３遺構面ベース層	軒平瓦	〔7.6〕	〔4.7〕	〔8.5〕	－	－	－	
	414	336	798	3	東部	ＳＸ 309	軒平瓦	〔9.0〕	3.2	〔5.2〕	－	－	－	
	415	331	908	3	東部	整地層	軒平瓦	〔8.9〕	3.3	〔5.1〕	－	－	－	
	416	313	332	1	東部	ＳＫ 121	軒平瓦	〔9.8〕	4.0	〔5.5〕	－	－	－	
	417	325	356	2	東部	ＳＢ 208 上面焼土	軒平瓦	〔9.6〕	3.6	〔4.8〕	－	－	－	
	418	326	1356	2	東部	ＳＢ 208 上面焼土　土壌選別	軒平瓦	〔7.0〕	3.6	〔6.2〕	－	－	－	
	419	337	833	3	東部	ＳＸ 312	軒平瓦	〔10.5〕	(3.7)	〔4.3〕	－	－	－	
	420	340	1094	3	東部	ＳＸ 351 下位南半	軒平瓦	〔11.6〕	3.5	〔7.2〕	－	－	－	
	421	322	385	2	中央部	精査中（ＳＢ 202 内？、ＳＸ 124 内遺物含む？	軒平瓦	〔7.0〕	3.9	〔4.8〕	－	－	－	
	422	338	977	3	東部	ＳＸ 316	軒平瓦	〔14.0〕	3.8	〔5.3〕	－	－	－	
	423	317	485・700	2	中央部	ＳＸ 127 下層	軒平瓦	27.6	4.2	29.9	－	－	1.7	
	424	329	575	3	西部	ＳＢ 205 ベース層	軒平瓦	〔17.9〕	4.5	〔7.7〕	－	－	－	
	425	330	575	3	西部	ＳＢ 205 ベース層	軒平瓦	〔14.0〕	4.6	〔8.9〕	－	－	－	
	426	327	632	2	中央部	ＳＸ 207	軒平瓦	〔13.4〕	3.8	〔6.7〕	－	－	－	
	427	304	238	1	中央部	撹乱（近代井戸）	軒平瓦	〔21.0〕	4.0	〔10.3〕	－	－	－	
	428	305	238	1	中央部	撹乱（近代井戸）	軒平瓦	〔7.7〕	〔3.6〕	〔7.8〕	－	－	－	
	429	312	292・332	1	東部	ＳＫ 121	軒桟瓦	〔21.6〕	4.0	25.2	24.5	－	1.4	
	430	307	319・358	1	東部	ＳＫ 104	軒桟瓦	〔19.5〕	〔1.5〕	34.6	－	－	1.7	
80	431	311	210	1	中央部	ＳＫ 113　焼土	小菊丸瓦	(8.0)	－	〔6.0〕	－	－	－	
	432	318	216	2	中央部	ＳＢ 201 上面整地層	小菊丸瓦	8.0	－	〔2.0〕	－	－	－	
	433	310	227	1	西部	ＳＫ 112	丸瓦	－	－	24.0	12.5	5.2	1.6	
	434	323	983	2	中央部	ＳＢ 204 カマド断割⑬	丸瓦	－	－	23.3	12.4	6.2	1.6	
	435	320	341	2	中央部	ＳＢ 202 上面焼土	塀瓦	－	－	〔8.3〕	〔23.8〕	－	－	
	436	339	1106	3	東部	ＳＸ 321	引掛け（軒平）瓦	－	－	〔13.4〕	〔11.3〕	－	1.9	
	437	344	1281	5	東部	第５遺構面上面	雁振瓦	－	－	〔10.9〕	〔14.3〕	〔6.7〕	2.1	